



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	樺太のポーランド人たち (A.Janta-Połczyński, "Poles in Sakhalin." Japanese translation from the Polish by S.Samitsu and commentary by K.Inoue & Y.Ogata)
Author(s)	ヤンタ = ポウチンスキ, アレクサンデル; 佐光, 伸一//訳; 井上, 紘一//注釈 他
Description	ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて. 2013年10月20日. 北海道大学学術交流会館. 札幌市 主催: 北海道ポーランド文化協会, 北海道大学スラブ研究センター. 共催: グローバルCOE プログラム「境界研究の拠点形成」. 協力: 駐日ポーランド大使館, ポーランド広報文化センター
Relation	「ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集
Issue Date	2013-10-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53476
Type	conference paper
File Information	109Polczynski.pdf



樺太のポーランド人たち¹

アレクサンデル・ヤンタ＝ポウチンスキ
佐光 伸一 訳／井上 紘一・尾形 芳秀 注釈

(一) プロローグ

東京の冬は厳しくはない。厳寒といったものではなく、せいぜい冷え込み程度である。雨か、雨混じりの雪が少し降るぐらいである。むしろ晴天のことが多く、空はとても青く澄みきっている。背の低い住宅街の屋根の向こうには窓を通して、日本の神聖な山である富士山が広がり、それはまるで雪のピラミッドが水平線上にそっと書き込まれたかのようである。

夜になると、晴天は、主に海からやって来る風に包まれるが、それとて冬だけである。翌日になると、私が住んでいる家の周りではいつもは緑の庭が霜氷によって白くなっていることがある。庭全体は、まるで花壇のように、背の低い小さな樹々や、その枝の上に茂る針葉樹の葉の群生に囲まれ、庭の真ん中にある銀色のプレートのような池の底へと、芝生の斜面を流れて流れている。池にはアーチ状に湾曲した橋が架かり、橋は水面に反射し円を描き、それは空中に宙づりになり、庭のフレームの中に閉じ込められている。

このような冬の晴れたある日、私は日本の北方、サハリン[樺太]に出かけることを決めた。

何のために。これこそ旅立つ前には自分に必ず問うことになる、いつもと変わらぬ質問である。何のために。何のためにひとは問題や悪天候や困難さを求め、世界中を漂泊し彷徨(さまよ)うのだろうか。何のために。

何か秘められた力や、論理的でも、賢明でも、理性的でもない何か別の動機や、はるかかなたの異郷の物事に引き付けられる法則があるに違いない。謎を解決するためという答えもあるかもしれない。しかし不安に駆られて、そう好奇心よりは不安に駆られて、もっと分かりやすく言えば直感や理解しがたい衝動に駆られ、より本質的に言えば、何か隠された理由により、そこへと押し出され、駆り立てられ、導かれると説明もできよう。このようにひとは支度をし、決断し、ついにある日、自分でもなぜそうだったか分からぬまま、旅立つのである。

しかし、日本の北方となると、私の日本滞在の初めから注意を引き付けた別の動機も存在した。それはサハリンにはポーランド人がいるからである。ツァーリのロシア、ツァーリの流刑の時代からの生き残りである。東京にいた当時の公使²であり、後にワシントンで大使を務めた人物が、日のいずる島のポーランド人の最大の集落をおよそ十年前に訪問して以降は、誰

¹ 原典：Aleksander Janta-Polczyński, “Polaki na Sachalinie,” w: Aleksander Janta-Polczyński, *Ziemia jest okrągła* (地球は丸い), str. 241–298, Warszawa: Rój (1936).

A.ヤンタ＝ポウチンスキ(1908–1974)は、ポーランドの紀行作家、ジャーナリスト、詩人。ポーランド電報通信社東洋特派員として1933年12月末に来日。ポーランドのユゼフ・ピウスツキ元帥の命を受け、同元帥の実兄プロニスワフ・ピウスツキの遺族の消息を尋ねて、1934年1月4日、大泊港に着き、1月12日まで樺太に滞在した。

² 再興されたポーランド共和国の初代駐日特命全権公使スタニスワフ・パテク(1866–1945)。在任中(1921–26)の1925年8月にサハリン在住ポーランド人を初めて訪問した。

もそこには行っていなかった。

したがってそのことはいっそう私を駆り立て魅了したのだった。問題はただひとつだけだった。季節である。東京においてさえこのような旅行は、まるで北極遠征のように見なされる。自分がアムンゼンやリチャード・バードのような毛皮の外套を持っていないことを考えると、出発する前から寒気がした。私は衣装ダンスにいろいろな事態に対応した衣服の備えがあるが、北極に対応したものはなかった。頼みもしない情報提供者の次のようなセリフのせいで、私は勇気とぬくもりの最後のかけらも失った。

「冬にサハリンだって」

「聞いたこともないよ」

「この季節にそんな旅行を」

「夏まで待ったほうがいいのではないですか」

しかし、私は夏にはまったく別の緯度と経度の場所に行く予定だったので、すぐ出かけるか、あるいは永久に行かないかを決断しなければならなかった。「聞いたこともない」って、でも私自身は聞いたことがあるのだ。冬に不吉なこの北方に出かけた人が東京にいるからである。天候に敏感だと言われている日本人が、である。

私が見た地図が示すところによると、南樺太の首都である豊原は北緯 47 度に位置し、それは地球の反対側の緯度というルヴフ³に相当する。私の旅をヨーロッパ地図に移し変え、豊原をルヴフに重ねると、およそクレタ島からルヴフまでの旅になる。つまりどういうことか。それほど悪くないということである。

私の記憶が正しければ、ルヴフから北極まではかなりの道のりである。この比較をより正確にするためには、寒流が流れ込み、カムチャツカから直接風が吹き、オホーツク海のそばに横たわっているルヴフを想像すればそれでよい。こんなところで日本家屋に住んでいるのだろうか。よく知られているように日本の家屋は窓

が紙で出来ているというのに。

これからの出来事に対し先入観を持つのはやめよう。今のところ私はまだ東京にいるのだし、ジャパン・ツーリスト・ビューロー(JTB)でこの旅行の地理と時刻表について研究中なのだから。それは次の通りである。

初 日	14 時 35 分	急行列車で東京の上野駅発
二日目	6 時 20 分	青森(日本の本州の北の港)着
	7 時 10 分	北海道行きの船出発
	11 時 40 分	函館(北海道、蝦夷の南の港)着
	12 時 30 分	函館から北部へ急行列車で出発
三日目	6 時 35 分	稚内(北海道の北の港)着
	8 時 30 分	サハリン行きの船 ⁴ (宗谷海峡経由)出発
	16 時 30 分	大泊(サハリンの南の港)着
	17 時 30 分	豊原行きの列車出発
	18 時 25 分	豊原着

言い換えれば、四回乗り換えのある、距離にして千マイル、時間にして五十四時間の旅である。そこから明らかになるのは、ひとがまるで悪魔のように私に語っていた旅も、それほど恐ろしいものではないということである。

この予定に従い、私は本日出発する。北方遠征ということに合わせて、可能なあらゆる防寒装備をした。一目で分かることだが、毛皮の外套に、セーター二枚、ウールのダブルの手袋、すべてがダブルで、私だけがシングルで、旅に乗り出した。

ポケットは紙でいっぱいである。書類や指令書である。ポーランドの新聞を個人的に持ってきた。東京の公使館で見つけ集めたものである。ノートには樺太に住むポーランド人数名の名前が書き留めてある。それほど多くないし、正

³ 当時オーストリア統治下にあった旧ポーランド領(ガリツィア)の都市。ソ連時代はリヴォフと称したが、今はウクライナ共和国の都市リヴィウである。

⁴ ヤンタ=ポウチンスキの便船「宗谷丸」には、満洲国外交部次長の大橋忠一や中央情報社の菱沼右一社長が同船していた(菱沼右一「人物往来」『樺太日日新聞』1934年1月7日付朝刊)

確でもない。東京の公使館の公文書は 1929 年に焼け、わずかに数枚が災禍を免れたにすぎず、それとて端が焦げているのである。しかしこれら数枚の紙は私にとって今のところ、唯一の情報源なのである。

しかし私は情報などあてにしていない。もうすぐ現地に行って、実際どうなっているのかを自分の目でみることができるのだから。この「現地で」というのが、何年も前から私にとって、人や、国そして物事を学ぶための唯一の方法となっていた。この方法を今度は樺太にも試してみよう。

(二)出発

日本の列車は世界最良のひとつの名声を博している。北方行きの特急には一等車がないが、プルマン式車両の二等車が備わっており、真ん中に通路があり、脇にベッドがあり、ベッドは日中はずらっと並んだ快適なソファに早変わりする。列車はどんな気難しい要求にも応えることができる。もちろんアメリカ由来の共同寝台というシステムに慣れる必要があった。それは完全に日本の習慣の精神に合ったものである。つまり異性がいても遠慮することなく、この点に関して彼らは慎重さを知らないし、持ち合わせてさえいない。

この旅の初めから最後まで私は日本人の中で唯一の白人であった。車両では、自分の家のように場所が割り振られ、まず初めに靴を脱いだ。そしていつも笑顔の感じのいい使用人のボーイ、現地風に言えば格好のいい制服に身を包んだ「ボーイさん」が靴をすぐに集める。このボーイこそは歩く親切心のような人物である。

アメリカ製の車両できわめて東方的な特徴のひとつは、縁が真鍮製でぴかぴか光った痰つぼが車両の床に埋め込まれていることである。それは普通われわれが紙屑入れやゴミ箱として利用しているものである。

車窓の向こうには穏やかな日本の村の風景が通り過ぎる。遠景には万年雪に包まれた峰を頂く山々が見える。近くには米の畑が見える。刈り入れ後の畑が水に浸り、穏やかな小山の上で半円の段丘となって広がっている。また柳や

藺(い)ではなく、竹の林も見える。

突然この風景の中から現地の建築物の一角が現れる。といっても単なる村人の百姓家であるが。薄く弱々しい壁、等間隔に水平に配置され、紙がはめ込まれた窓枠、玄関口、廊下、庇、竹の細い枝からできた垣根、支柱、それに支えられた屋根はまるで屋根板に隠されているかのようで、きわめて急斜面になったり、平たく広がったりしているが、縁はいつも折り曲げられている。

窓外の風景を楽しむ時も終わった。すでにずいぶん暗くなり、すぐに夜がやって来た。夜はとても暗く窓の向こうには灯りが群れとなって散りばめられ、それは薄闇の底から空に向かって立ち上がる遠方の山々まで散らばり、日本が縦も横もいたところで電化されていることを物語っている。

食堂車で私は自分がひとりぼっちであることをある程度意識した。すべての日本人のグループがわたしの方を、まるで変人でも見るかのように、無邪気な、子供のような、つまりそれゆえに何とか我慢できる好奇心を持って眺めている。私たちは首都を出発し、旅行者が、そしてむろん外国人はめったに通らないルートを進んでいる。それはこの白人の旅の道連れに対する乗客の態度にも反映している。

私はお椀の中に五つか六つくらいの細かな料理の入っている日本のお昼ご飯を注文した。それは切り分けられた生魚の鯛や、タコの肩の部分であり、それは酸味のある味で肉厚があり硬い。そして野菜で濃厚な味付けのされた魚の味のするブイヨンスープ、そして醤油という辛いこげ茶色のソースが赤くて辛い大根にかけられた生野菜のサラダのようなもの、そしてお米のご飯は欲しいだけもらうことができる。

私がこの食べ物とお箸で格闘している様をみんなまじまじと観察していた。私はこのそれほど困難でもない技能の習熟に十分な時間があって、黙って上手に行動したので、乗客からは笑顔の共感の念が私に寄せられた。結局好奇心からは解放されたので、私は気分を変えるため幾分自由に周囲を観察することができた。

私の視線と注意は、この食堂車で私たちにサービスを行う日本人の若い女性の上に思わず

留まった。飾り立てていたので(きちんとした服装をしているとは言いがたい)見ているのがつらかった。日本でこのウィーン風あるいはベルリン風のウェイトレスのスタイルを観察する機会は一度ならずあった。白いエプロン、髪の毛には白いレース、ワンピースは脇の下でカットされていて(つまりベルトが脇の下にあるのだ!)、ランプの可愛いシェードのような形で足にぶらさがり、膝の上で留まって、必ずしも格好よくはない足の残りをあらわにしている。全体はこのように上出来でなく、みすぼらしく、彼女を眺めると、立派で風格がある着物の仕立てがなつかしくなり、着物の上で広い模様の入った帯で平らにすることによって、胸のほうではなく背中の方が盛り上がった日本女性のシルエットの方が好ましく思えた。

この後ずっと樺太まで私について回る面倒を引き起こすことがひとつあった。言葉の問題である。お決まりの会話から少しでも離れると、日本語以外の言葉ができる人は誰もいなかった。つまりどこでも通じるのは、英語の会話というよりもむしろ機械的に習得したいくつかの言葉だけである。聞いたり理解したりするのに慣れたものとは少し違った風に質問すると、私たちは意思疎通が不可能となる。あてずっぽう以外の方法はなく、身振り手振りで推測するが、自分が理解されたか、自分が何の話をしているか相手が知っているか、確信はできない。

東京では幸いにも小さな本を持っていた。それは赤い祈祷集であるが、突然予期せぬ必要があった場合や何か日本語で言いたい場合には役に立っていた。自分が旅行する国では、現地の言葉で少なくとも十五個くらいのフレーズは言いたいという野心を私は最後まで保ち続けていた。

それらのフレーズを、人々がとりわけ親切心の国である日本で、さまざまな礼儀を示す機会に寛大に与えられた、何か必需品ではない感じのよい付け合せのような、ぜいたく品のように捉えてくれることはとても嬉しいことだった。別の場合、つまりその親切心が必要性に代わるとき、つまり誰も英語を理解しない場合、私が自分の「日本語ハンドブック」からふさわしい状況を見つけ、文章や単語を的確に選び出す必

要があるときには、私が日本語の話し方、特に理解の仕方を彼らに教えているのだという誤解が生まれることがあった。特に、彼ら日本人が理解できない場合にそうだった。

(三) 北方の島に関する情報

北海道は見渡す限り雪が降る。天気の良い日には、厳しい寒さが雪の表面や、水平線のはるか遠方から立ち上がりこちらに迫ってくる絵のように美しい山の姿を照らし出す。列車は機械で脇に除雪された雪の谷間を全速力で進み、車両は揺れ、窓の外の世界は陽光に溢れて陽気で、背の高い円錐形をなす駒ヶ岳を、視界の届くぎりぎりの範囲まで追いかける。駒ヶ岳はヴェールのような雲に包まれ、ここ北海道の南部では、富士山と同じ象徴と聖地の価値を持っている。第二の富士山と呼ばれている所以である。

何か喜びのようなものを感じ、私にとってこの冬の初雪であるこの果てしなく続く雪景に恵まれたという有頂天の感情を覚えた。今朝、青森港で夜明け前に起きたとき、私を起こしたのは、戸外から吹いてきた厳寒の風だった。ホーム上には周りに雪山が出来ていた。列車から船に乗り換えたのは、まだ夜だった。そのときようやく夜が明け始めた。雪は空色や群青の光に溢れ、遠方の海岸の盛り上がった岸辺のあたりではばら色に染まり、その後、雪の白さが燃え立ち、それはいたるところで目に突き刺さるほどだった。冬だ。船のマストの上では霜の花が咲いていた。

これから北へと旅立つ。さらに遠くへだ。明日はすでにサハリンにいる。私はほとんど人のいない車両の窓のそばの静かな自分の場所に戻り、スーツケースの中から分厚い日本年鑑を出し、樺太について記載されたページを開いた。サハリンの南部は日本に属するので、「樺太」という名称を持ち、「カラフト」と発音するとのことである。

ふと気付くと、本を読んでおらず、本から頭を上げ、サハリンに関する考えが自由に展開するままにしていた。私の想像力の中では、この世界の果ては、人類の残酷さ、拷問と徒刑の恐ろしい歴史と結びついた悪魔の島としてこれ

まで存在し続けていた。シベリアの果てといった感じである。知っていることといえば、世界から切り離され、神や人からも忘れ去られた、いつも変わらぬ無慈悲な島ということのみである。非人間的な島と言われているのも故あつてのことである。犯罪と涙の島である。流刑者、犯罪者、社会や人生から見捨てられた者たちが完全に姿を消すためにやって来る島、鞭が支配する島である。役人、司祭、誰であろうと罰としてここに送られてきたのである。罰として犯罪者と暮らし、犯罪者の番をし、必要なら鞭打つことを余儀なくされていた。サハリンでは鞭打たれることになる者は少なくない。

強制的に居住させられた居留民や住民、犯罪者を取り仕切る島の上役および権力はやりた放題であった。すべて自由に任されていたのである。彼らのことを、警棒を持ち監督している者もいなかった。犯罪者を厳格・無慈悲に扱うのが最良のことだった。つまり鞭打つことである。もっとも自分たちは犯罪者の暴動や復讐を絶えず恐れているのだが。そのような事件は一度ならず起こっている。サハリンの森は、脱走した囚人の一味を匿っている。しかしそれとてたいした損害ではなかった。

したがって、ここでは人間狩りが行われていた。犬に見つけられた者は言い訳する間もなく射殺されるという暗黙の搜索があつた。ツァーリの国の最北の地である北方の島では、その歴史に耳を傾ければ、恐怖心のあまり髪の毛が逆立つようなことが行われていた。現在、この同じ島から届くニュースはそれとはまったく別のものである。1905年の日露戦争の結果、ポーツマス条約によりロシアが日本に譲渡したサハリン南部は大日本帝国の北端をなしている。

サハリン島はアザラシのような形をしている。オホーツク海と日本海の間に浮かび、ロシア沿海州の向かいに横たわり、緯度 50 度線でまるでナイフでのように真っ直ぐ切り離されたこのアザラシの尻尾は、ここ二十五年間で日本の植民者が急激に押し寄せる土地となった。この地で開拓者としての自分たちの能力を試し始めたのである。道路や鉄道が作られ、この地方は発展し始めた。その暗い歴史もゆっくりと忘れられた。北海道あるいは本土や九州とい

った、もっと遠くの島から植民者がやって来た。

1905年にはわずか1万2000人だった樺太の人口は、2300%増加し、1932年末の集計では29万3000人であり、その大部分が日本人である。さらにそこにいるのは、かなり多くの朝鮮人、「アイヌ」と呼ばれる現地住民が少し、わずかな数のロシア人残留者、そしてポーランド人である。

南樺太の面積3万6090平方キロメートルは、大日本帝国の総面積(67万5086.941平方キロメートル)の5.3%にあたる。この地域は台湾より大きく、北海道のおよそ半分、朝鮮の六分の一であり、日本の統治時代からとりわけ農業分野で進歩し発展した。1931年の農業生産高は200万円以上であり、大麦、燕麦、ジャガイモでは国内第一位を占める。

南樺太の最も豊かな二つの財産は、森林(200万ヘクタールつまりこの島の三分の二)と魚である。かなりの土壌に石炭があり、さらにこれまで少ししか採掘されていないが、北部のロシア側には石油も豊富にある。漁業、狩猟は、オホーツク沿岸の島の東岸の村に在住するわずかな数のアイヌ人たちの主な収入源となっている。

私は本を閉じた。窓の向こうにどこまでも広がる雪原の上に、速く流れる雲に遮られていた月が完全な姿を現した。風が突然吹き、雪煙が起こった。北に向かうほどいっそう悪天候になる。私は赤い本で「風」という言葉を捜しだし、車両の中で私にベッドを出した客室係に「風(ふう)」と試みてみた。

彼はとても感じよく笑い、お辞儀をしながら日本語で言った。「オヤスミナサイ」。

自分のところに戻り、辞書を開き、どんな意味かを調べてみた。そんなことだったのか。「おやすみなさい(Dobranoc)(ドブラノッツ)」ということだった。

(四) 恐ろしい渡航

早朝、私たちが終着駅である稚内に到着したとき、周りの世界は雪に覆われ灰色で、いたるところで風が吹きつけていた。乗客は、旅の終りに暖かい車内で融けてしまったかのように、

わずか十数名しか残っていなかった。駅は暖かく、ただ窓の外に、カンテラと吹雪でぼんやりと曇った淡い灯りがかすかに見えるだけだった。さらに、待合室の窓を通して、薄闇の中、近くの岸辺で激しく揺れる漁船も見えた。サハリン行きの船は、空が明るくなってから出発するそうだ。明るくなると仮定しての話だが。

待合室の中は寒かったので、みんな鉄製のストーブを真ん中に引き寄せ、その周りに集まった。みんなというのは日本人のみである。私は唯一の外国人、よそ者、白人であった。彼らは主に和服を身にまとい、木製のサンダルである「下駄」を履いていた。ただヨーロッパ風のつばつき帽子を被っている者もいたし、分厚く、丸いつばなし帽子を被っている者もいた。まるで毛皮でできたビスケットのような不思議な毛皮の襟と耳あてで耳の縁だけを覆っている者もいた。ほとんどすべての日本人が冷気を吸い込まないように、表が黒く、綿やときには毛皮の詰め物をしたマスクを顔にしていた。

空が明るくなった。私たちを船まで送り届けるために、舳が岸辺に近づき、波に揺られながら待っていた。積載容積二千トンの船は港湾の深くに錨を沈め停留していた。

海が防波堤にぶつかり、白い猛り狂った泡が二階の高さまで跳ね返っていた。素晴らしい旅行が私たちを待ち受けていたのは言うまでもない。北方の海はこの時期、冗談ではすまされない事態になることがある。船は大きくないが、ほとんど真新しく、清潔ですべての快適さを考慮して装備した船室を備えており、まるで船自身がもう待ちきれないかのように、港湾の中で揺れている。その後、錨は上げられ、方向転換し、海へと舵を取り、スクリュー全開で海へと進んだ。吹雪で覆われた稚内の小さな港と小山の間を通して、私たちは抑制がなくなり、むき出しとなった恐ろしい水面へと出て行った。

私は下の甲板からそれを眺めていた。風が何だというのだ。狂った強風が何だというのだ。風は、たてがみのように前甲板を吹き払い、連なる波を鞭打ち、雨が鋭くそして硬くぶつかる前に、顔に細かな塵として埃を吹きかける。船は驚くほど揺れ動く。ときには波は船首にまで達し、船が転覆するのではないかとさえ思われ

る。しかしただ横に倒れたり、両側に傾いたり、波の上に乗上げたりしていた。二時間ほど、このように狂ったような異常な旅を続けていると、ボーイの一人が私のところにやって来て、ノートから引きちぎった一枚の紙を差し出した。そこには乗務員か船員の一人が、あまり正確ではないが、理解するには十分な英語で何かを書きつけていた。

ポーランド語に翻訳するならおよそ次のようになる。

本船は、大泊には向かっていません。進路を変えたからです。嵐がひどいので待たねばなりません。明日、大泊に向かいます。

それ以上は知るよしもなかった。まったく言葉が通じなかった。私の赤い本は、アングロサクソン系旅行者向けに、もっとも役立つような情報を盛り込んだ日本語ハンドブックだったので、いらいらさせられた。つまり自分が言いたいことは何もそこで見つけられなかったのである。したがって私は最後に本に載っていることのみを言ったのだが、日本人の答えは残念ながら、私のハンドブックの著者が提供しているものとは、まったく違った響きをしていた。

というわけで嵐のためなぜ船がサハリンに行かず、稚内に戻っているか知ることはできなかった。先ほど離れたばかりの島の小山の連なりの陰に身を潜め、船は大きな音を立てて錨をおろし立ち止まった。立ち止まったという表現は的を射ている。というのも私たちはユダヤ人が市場で衣服を試着せず、あれこれ前や後ろや脇に投げ捨てるかのように揺れていたからである。直前に受け取った通知の最後の文章を眺めた。「明日、サハリンに行けるかもしれません」「行けるかもシレマセン」とのことである。

私は客室の窓から眺める。海はまるでどこまでも続く川のように船の上を流れ、どこかに向かって急いでいるようであり、波が次々と押し寄せ、風はざわめいているというより、闘いの前の闘牛のように吼えていたと言えるほどだった。昨日、「風」を日本語で何というか思い出し、それが何かを理解しながら、ポーランド語の単語を補って発音してみた。

「風(ふう)のクソッタレ(Psiakrew)(プシャクレフ)」

三日の予定の旅はまるでゴムのように弾力的に四日に伸びた。これ以上伸びないと誰が分かるだろうか？ そんなこと分かりっこない。

(五)四日目

甲板で日本人に会った。彼は私に対し、この国ではあまりないような質問を英語で尋ねたのだった。それは「あなたは誰ですか」「何のためですか」「どこから来たのですか」「なぜですか」といったものだった。私は彼に借りを作らないように返事をした後、彼に対しても同じ質問をした。彼はジャーナリストで、東京の「中央情報」という名の雑誌の編集長だと分かった。この雑誌のタイトルは「中央のニュース」あるいは、「中央からの情報」という意味である。

この雑誌は、祖国の外、つまり植民地や外国に住む日本人向けであり、わが国では「ポーランド通報」に相当する。彼の名は菱沼右一⁵といった。二年半サハリンに住んでいたとのことである。彼はこの地方について語り始めた。サハリンに興味を持ったのは以前のことだが、自社の雑誌との関係で相変わらずこの地に携わっているという。

「ピウスツキ元帥⁶のお兄さんのブロニスワフがサハリンに住んでいたことはご存知ですか」と彼は尋ねた。

私は、自分は知っているし、サハリンと北海道の原住民であるアイヌ人に関するブロニス

ワフの研究についても聞いたことがあると言った。

菱沼氏は活気づいて言った。

「日本語のタイトルで『北蝦夷秘聞』という本をご存知ですか。私の義理の弟である能仲文夫⁷が書いたのですが、ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン滞在史と彼の恋愛事件に丸々一章を割いています」

「それはまったく知りませんでした」

「いいですか、ロマンですよ。本当のロマンです。サハリンでは予期せぬものがあなたを待ち受けていますよ。それをあなたにお見せしてご案内し、見つけ出すことをお引き受けしますよ。私と義弟はそのことを知っていますから。もう何ヶ月もこの問題の痕跡の探索に費やしてきました。あなたはお自分でそれを目にすることになりますよ。もうひとつ別のこともお知らせしましょう。私たちの船には満州国外交部次長が乗っていますよ。もしお望みなら……」

事態は滑稽なものになった。山と山はぶつかることはないが、ひととひとはぶつかり出会い、宿命や運命のありえない定めにより同じ方向に導かれることがある。私の旅にはそのような体験や兆候が少なからずあった。私は新京の満州国外交部では大橋次長⁸に会うことができなかった。私が満州の首都滞在中には彼は一度もいなかったからである。今、このふたつの島の間の、波立ち荒れ狂う海上で、船の向こうでは波がとどろき、船がリズムカルに揺れる中、旅の道半ばの船上で、何の脈略もなしに出くわす

⁵ 菱沼右一(ヒシヌマ ウイチ)(1883-1944)、『報知新聞』『国民新聞』の記者・社会部長・理事を経て、『樺太日日新聞』の主筆となる。1931年、東京で「中央情報社」を創立して社長を務めた。文筆活動には、葛西猛千代・西鶴定嘉との共著書『樺太の地名』(1930)もある。

⁶ ユゼフ・ピウスツキ(1867-1935)。ブロニスワフの年子の弟。1918年に国家の再興を果たし、新生ポーランド共和国の初代元帥として国家首席に就任した。

⁷ 能仲文夫(ノナカ フミオ)(1907-1983)は、樺太日日新聞記者、外地評論社社長兼主筆を経て、拓殖省・南洋庁・朝鮮台湾総督府・満鉄・南洋開発で嘱託を務めた。戦後は星光化学工業社長。著書には上記の『北蝦夷秘聞～樺太アイヌの足跡』(大泊・豊原：北進堂、1933、復刻版『樺太アイヌの足跡』東京：第一書房、1983)のほか、『血に彩られた北樺太～現状と資源』(中央情報社、1935)、『赤道を背にして～南洋紀行』(復刻版 東京：南洋群島協会、1990)などがある。

⁸ 大橋忠一。大橋は満洲国建設の立役者の一人で、当時は次長とはいえ事実上の外務大臣であった。

のである。

彼は深い肘掛け椅子に座り、アメリカ人風に脚を机の縁にもたせかけ、何かの書類に没頭していた。彼は親切で感じがよく、満州国はいつ成立したか、むしろ「どのように成立したか」についてしばらくの間私に話してくれた。大橋次長はこの問題の展開を初めから知っている、あるいはそれが始まる以前から知っている人間の一人とも言えた。彼は私に、すでに知識や歴史として受け入れられている最新の状況は、本人にとってもいかに予想を超えるものであったかを語った。というのは、満州がこれほどの規模になり、世界地図に現在のような形で出現しようとはだれも予想しなかったし、知る由もなかったからである。

彼と話していると、この人物は、歴史が新しい形を成すのを監視し、ただ見守っているだけでなく、それが形作られる作業に対し、ほかならぬその展開に対し、少なからず影響力を持っているという印象を受け、そのように理解した。しかし彼の話を私が意味づけしようとする、私にとって重要な具体的な点はすべて一般論の中へと消え去ってしまう。その一般論というのは、満州問題に関しては、運動や、改革、革命、戦争はいったん解き放たれると、ひとはある程度までしかコントロールできないという、明確だが、あまり具体的ではない暗示である。もしそれらの影響力が強まり、自分の活動範囲を超えてしまうと、すぐにその影響力は、自分たちに定められた範囲やプログラムを破壊してしまうのである。

その全体性はひとの手を離れ、己自身の重さとりズムによって自分の求める方向に発展し、先へ進み、入念に準備し熟慮したにもかかわらず、予想を超える、あるいは予想を裏切るような結果へといたるのである。それはコントロール不能になり、己の圧力と勢いによって導こうとする人や、ただ歴史の鼓動に合わせて舵を取ろうとする人を巻き込むのである。

私が大橋次長との会話から得たのは以上のような結論だった。彼との会話は、外交上のあいまいさに溢れていたが、その素材の表面の下には、満州国の誕生をめぐる、すでに確立し歴史に組み込まれた解釈や、様々な事件の結末

を訂正するような未知の事実や事件の宝庫があった。なぜなら現代史とは、かつてもそうであったし、現在も相変わらずそうなのだが、事実ではなく、政治に仕えるものだからである。

ようやく翌日になって、わたしたちの船はそれより先に進むことを決定した。朝になると錨を揚げ、「大海原」に乗り出したのだった。

私はこれまで多くの海を見てきたが、今回私たちが海岸の防波堤を越えて、防波堤が灰色の日の彼方の薄闇の中に遠ざかるやいなや出くわしたような、野性的な海は見たことがなかった。

恐ろしい嵐はいつまでも続いた。山のように波が高まり、積み重なり、私たちの船に押し寄せてきた。すべての乗客は見ているのが気の毒になるくらい船酔いしていた。わたしはまだ何とか我慢し持ちこたえていたが、おそらくもう長くは我慢できないという気持ちになったのは、海の上では初めてのことだった。甲板を散歩した。というのも船室ではひとはまるでボールのように投げ捨てられるので、座っていることはできなかったからである。私は具合の悪さから何とか気をそらすために、海の写真を撮った。というのも読書などできないことは明らかだったからである。

このような状態が昼食まで続いた。私は我慢のかけらを寄せ集め、心配することは何もなく、まるで何もなかったかのように食堂に行こうとした。

食堂では、揺れはいつそうひどく感じられた。最悪なのは、終りなくどこまでも傾いていくという感覚だった。この傾きは、外的世界のすべての苦しみとなっている平衡感覚の完全な欠落を何とか自分で補うために、ゆっくりと穏やかに胸の奥まで吸い込む呼吸よりも長い間続くのだった。船は横に傾き、長い間戻って来なかった。転覆するのではないだろうかと思うほどだった。

私は何か食べるものを注文した。私はこの食堂室では、驚いた顔をした青白いウェ이터を除くとひとりきりだった。このウェ이터は若い青年で、今日のような日には仕事どころではないと思っていることは明らかだった。しかし、この生き残りの乗員は、倒れないようにテーブルや椅子の肘掛けを支えながら、私の周りを忙し

そうにあたふたしていた。彼は注文したものを私のもとに運んできた。船が反対側に傾いた瞬間に私のテーブルに近づいてきて、テーブルのそばで立ち止まった。何か見えないが恐ろしい力が彼をそのテーブルから引き離し始めたからだ。しばらくの間、その力に抗して、彼は前へ進もうと試みた。しかし船はさらに脇へと傾き、容赦なく、彼を後方へと引っ張った。

風がこの青年に吹きつけたため、私のところに近づくことができなかったのである。耐久力が問題となっている。あと一ミリメートル、あとせめて一秒。自分の身体を英雄的な努力によって、手でテーブルの脇にしがみつき、彼はお盆を私のテーブルに置いた。まさにこの瞬間に極度の揺れがやって来た。お盆は、まるで何か見えざる力により掃き出されたかのように、均等に傾いたテーブルから落ち、ウェイターは後方へと下がった。激しく後退しながら、倒れこみ、とんぼ返りをし、壁の方に転がった。お皿は、台所道具やきちんと閉めていない扉のあたりで割れて恐ろしい音を立てた。その背後では外の海の音や、船の連結部の気味の悪い音が轟いていた。粉々になったお皿からこぼれたスープや散らばったお米が隅に集められた。

これで私の昼食は終わった。もう一度試してみようとはしなかった。すぐに甲板に出てみた。それは船が自然の力によってまるで獣のように扱われる光景を最後まで見届けるためだった。船べりに立つと、巨大な波が反対側から襲い掛かり、泡を立て、水しぶきが船の脇に打ちつけ、山のような水の大きな圧力が押し寄せた。それは、まるで船を打ち負かし、沈め、打ち砕こうとしているかのようなようだった。

夕方近くになって、風が少しばかり弱まり、船を投げつけるのをやめ、激しく強く揺らす程度になったときには、皆ホッとした。わたし達の前には、遠方の対岸の暗闇の中で輝く大泊港の灯りがあった。もう樺太だ。

(六)初めの儀式

船から大泊港駅への出口のところで、日本人を待つ人込みの中から私を引き留める者がいた。彼はロシア語で話しだし、少し無遠慮な質

問をその場でいくつかした。私は、彼が警察官だということを肌で感じ、私に関する情報をすでに持っているのだと思い、自制しながら、しぶしぶ質問に答えていた。しかし最後にパスポートの提示を求められたときには、断固として異議を唱えた。

「なぜですか。私は日本の領土にいないのですか。日いずる国の国境など越えていませんよ。何か規則や法律でもあるのですか。それなのになぜパスポート検査などあるのですか。私が誰であるかをあなたはよくご存知なのでしょう。どうなんですか」私は彼を質問攻めにした。

「樺太だからです」彼はのらりくらりと言った。「大日本帝国の海外領土になるのです。東京により任命された別個の知事のいる植民地なのです」

仕方がなかった。私はパスポートの提示を拒否することはできなかった。警察官は列車まで私に同行し、パスポートで読み取ることできるものをすべて書き写し、私の名字が正確にどのように綴るかということについて丁重ではあるが私と議論した。列車は走りだした。したがって、私たちは一緒に次の駅に向かうことになった。というのもすべてを調べるには時間が足りなかったからであり、彼は列車での滞在を延ばすことによって、私が樺太にやって来た意図と私個人に関してより否定的な見解を作り出そうとした。

「つまりあなたはポーランド人がいるからということですね。彼らは何をしているのですか」まるで自分が知らないかのように尋ねた。

監視つきの旅は私をうんざりさせ始めた。窓外は深い闇であり、厳寒であり、吹雪が吹き払った雪の荒野である。車両の中には鉄製のストーブがあり、車掌がそこに炭をくべている。列車の中は船の乗客の熱気や、皆和服を着た大泊の住民の熱気に溢れている。ストーブのできるだけ近くに座りながら、目のところまでショールで身をくるむ者もあり、また毛皮の襟を立てている者もある。取調べをした天使のような監

視者が最初の駅で乗り込んでから、ずっと私の方を穴が開くほど見つめている。話をする者は誰もいなかった。

窓外に時折姿を現し、厳寒によって乳白色のコーティングのように凝縮した夜の雪の世界の中で、この旅行は一時間と少し続いた。豊原に到着した。誰もいない駅の建物から雪に覆われた広場まで、広々とした通り、むしろ道といったほうがよさそうなものが続いていた。人力車(それは牽引動物が人間である、速くて安い東洋の乗り物である)が、二輪車の二本の長柄の間で、新参者の旅行客を待ち受けている。車夫はみな手に提灯を持っている。馬をつないだ箱馬車は一台だけ脇に停車しているが、目の前には自動車用の車道が立ちはだかっている。

私はその箱馬車に乗り込んだ。ドアを閉めた後、私は足元に燃える木炭と雪かき用のシャベルを見つけた。鎖のついた人力車の後輪が、サハリンで昔からよく知られている囚人の足かせのがちゃがちゃというような音を立てた。私の手は仕事でいっぱいだった。片手にはスーツケースを持ち、もう片方の手には人力車の車夫とのコミュニケーションを助けるはずだが、実際はそれをより困難なものにしていた赤い日本語ハンドブックを握り締めていたからだ。しかしそばには菱沼氏がいた。彼は花屋という意味を持つ花屋本店(ハナヤ)という現地の最もよいホテルまで私を、というよりも車夫を道案内した。私たちは出発した。ホテルは、その所有者だけでなく、その様式と習慣という点からも日本式のものだった。

日本式というのは、あらゆるものが保守的だった。まず靴を脱ぐことから始まる。これは入口ですぐに行わねばならない。その後にはとても高い敷居を越え、マットを敷き詰めた廊下の木製の床の上に足を下ろす。ここからは靴下とホテルが提供するスリッパのみとなる。そして木製の日本家屋の内部を彷徨わなければならない。冬の夜、世界の果てからここまでやって来て、自分たちの言葉を話さず、習慣も知らず、必死にその場に存在し、その国や状況の異質性に何とか対処しようとする様がおとぎ話のように滑稽な、この奇妙な生き物を見ようと、従業員すべてが出てきた。

(七)雪の中の喫茶店

幸いにも駅からはずっと私の後ろには菱沼氏の姿があり、おそらくこの花屋本店に宿泊を希望していた大橋次長の姿もあった。

従業員は良心的で、私というこのエキゾチックな客に対し、あらゆる点で出し惜しみせず、最良の部屋を提供し、入浴の準備をしてくれた。滞在中、私は彼らの気配りの的となった。身振り手振りでコミュニケーションを取り、喜んで私の世話を始めた。着物を着た女の子たちが散り散りに走り、建物全体が、ひそひそ声や服の擦れる音や小走りで溢れ、女の子の一人が私を部屋に案内し(私は毛皮の外套にスリッパという格好だった)、数人の男の子が私の荷物を運んだ。スクリーン[襖のこと]が開いた。初めのスクリーンが開くと小さな玄関があり、もうひとつのスクリーンが開いた所が私の居場所である。部屋には家具がなかったが、清潔でぴかぴか輝いていた。床の代わりに藁のマット[畳]が敷いてあり、その上にはクッションと、小さな机がひとつ置いてあり、壁には木が張られていた。

壁の窪みには枯れ枝の入った花瓶が置かれ、その頭上には「掛物(カケモノ)」と呼ばれるものがあつた。それはここに特徴的な情景で、巻地図が開かれたような「掛物」には、大振りの筆遣いで書かれた文字がいくつか並んでいる。おそらく、何かの詩かあるいは中国哲学から取られた格言であろう。しかし窓の外で猛威を奮う厳寒がホテル全体と私の部屋まで浸透してきているという感覚を和らげものは何もなかった。

天井まで伸びるパイプ状の煙突を備えたストーブが部屋の真ん中に置かれているが、火のかけらさえなかった。むしろスクリーンと言った方がよさそうな窓は、外壁全体にわたって紙が張られていた。窓の外には本物のガラス窓で厳しい寒さの屋敷への侵入を防ぐための廊下があるはずなのだが、風と寒さに対してはこの薄い仕切りは何の役にも立たず、風も寒さも嬉しくなるほど部屋の中に吹きつけてきた。

北方での生活はこのように壁の取り払われた籠の中で始まった。この籠なら窓から紙をはがしさえすればカナリヤだって飼うことがで

きるだろう。ここの寒さは比較できないほどひどく、まるで犬小屋のようだった。この日本風の建物は全体が同じ構造を持っており、樺太ではよく出会うタイプのもので、変わることはない保守主義の一例であり、また環境への見事な適応という日本人の構成要素をなす、伝統的な生活様式への結びつきの一例となっている。

つまりこういうことだ。日本家屋はマレー半島の亜熱帯地方に由来する熱帯地方の構造を持っており、強情にもそれを大日本帝国の北端まで持ってきたのである。気候がどうだというのだ。ここではそんなものは重要ではない。日本人は、もし必要があれば、気候に逆らってでも出かけて行く。これが今日の彼らの勝因である。木でできた家はザコパネの建築物を思い起こさせる。唯一の違いは窓に紙が張りめぐらされていることであり、これが冬のザコパネに受け入れられるかどうかは私には分からない。日本人は気候に対する我慢強さがないと言われていた。見たところ、そんな日本人など樺太には一人もいない。

私はストーブに火を入れ、勇気を出して毛皮の外套を脱ぐほど、私の素晴らしい鳥籠が暖かくなるにつれ、こういった私の物思いがゆっくりと広がっていった。ストーブに火が点っているうちはまだ我慢ができるが、いったん火を消すと、そこはもう冷凍庫である。私は自分の言語学的能力を最大限に発揮して、何か暖かい食べ物欲しが欲しいと表現してみた。従業員、魅力的な日本人女性は皆持ち場についており、いかなるときにもひざまずき(とりわけ、襖を開けたり閉めたりするときにはそうする。これは客、あるいは男性一般そのものに敬意を示すための日本の伝統的な習慣である)、私は直接まじまじと見るができないという気持ちになった。部屋に出入りする男の子も女の子も、私に理解できない言葉を浴びせ、彼らはそれらすべてをひざまずき、おでこで深く地面[畳]を叩きながら、心地よいおまじないのような言葉を絶えず唱えながら行う。沸き立つほど親切心に溢れ、彼らはあらゆる機会に、小さなしかし魅力的な敬意と好意で満たされている。

このことが彼らを楽しい思いにさせていることは明らかである。彼らはお互いに小さい声

で話し、私のことを話題に楽しそうにささやき合い、私がまた何か落とさないか、何かなくさないか、何か探さないか、何か分からずに彼らに尋ねないか、なすすべがなく微笑まないか、じりじりと震えるほど待ちわびていた。

彼らは、私がすぐに就寝すると思っていたようで、私のためにベッド[寝床]をしつらえるべく足走に退出した。彼らは地べたに寝ているのだ。厚くて硬いマットレス[敷布団]のようなクッションを広げ、その上に掛け布団を三枚ほど敷き、頭の下には、清潔さのためにタオルを敷いた重い大きな包みのようなものを置き、火を消した後、夜中に私が凍えて死んでしまわないようにと、足元には亜麻布で包んだ熱湯の入った容器[湯たんぽ]が置かれた。そして、私が服を脱ぎ、お風呂に入り、眠りに就くのを手伝うための、準備は整った。

しかし、そのとき、少し待ってもらうために日本語で「チョットマテ」と言った。私はそのとき、もう夜が更けていたが、豊原に住むポーランド人を誰か訪ねてみたいと思っていた。私は、この同じ通りで、教会の近くに住むピョートルフスキ神父の住所を持っていた。少年たちが私の手助けをしてくれた。私たちは一緒に、もう夜も遅いので誰もいない通りをカトリック教会[天主公教会]の方に向かって一団となって進んで行った。

(八) ザハリャシュ修道士

灰色の背の低い壁を持つ、バラックのような木造の家が通りに沿って広がり、雪の外套を羽織って腰をおろしていた。建物の脇には煙突の鉄製パイプがそびえ立っていた。出口の上の屋根の上には質素な十字架が架かっていた。豊原の教会はこのようなものだった。さらにこのすぐ隣に、家というより同じような木造のバラックがあり、それが天主公教会の所在地であった。

扉への通路は雪かきされていた。何度も何度もノックしてみたが無駄だった。最後に私はドアを押してみる決心をした。ドアは開いた。鍵がかかっていなかったのである。中に誰かいないか、私の日本人のガイドと一緒に探してみたが、誰も見当たらなかった。すでに私が戻ろう

としていると、奥深く、暗い中庭から誰かの足音が聞こえ、何かの人影が現れ、廊下を歩いて私たちの方へ近づいてきた。私は英語で話しかけてみたが、返答を聞いてすぐに、相手はポーランド人だと分かった。したがって、今度はもう一度ポーランド語で話しかけてみた。

「今日、こちらに到着したのです。ポーランドからサハリンにやって来ました」と私は言った。

「あなたはここにお泊りになりたいのですか」

髭で覆われた顔の奥深くから、用心深い、執拗な眼が私を眺めていた。

「私は宿を求めて来たものではありません。お会いしてお話をしたくて来たのです」

扉が開いた。日本人だった。私が自分の用件を話しているのを確認すると、別れを告げ出て行った。

「すぐに火をおこしますよ。お茶を御馳走します。どうぞお掛けになって、少しだけお待ちください。失礼します」

私はひとりになった。書き物机、本の入った棚、テーブル、つまりこれは教会の執務室なのだ。鉄製のストーブに火が点った。毛皮の外套を脱いだ。ティーポットを持って彼は戻って来た。

「ピョートルフスキ神父様でいらっしゃいますか」と、明りのところにいるのが、神父であることを知りながら、ようやく今になって聞いてみた。

「違います。ピョートルフスキ神父様は布教に行かれました。ここにいるのは私ひとりです。修道士ザハリャシュと申します。よろしく願いいたします」

会話は途切れた。お互いに尋ねた質問は以上だった。つまりポーランド人はいた。だからどうしたというのだ。ポーランド語を話す。まだ忘れていなかったのだ。他の人と同じなだけである。ザハリャシュ修道士は子供たちに教えている。しかし教えるのは、ポーランド語の授業のために教会に来ることを望んでいる子供だ

けである。彼らにしてみとときどきやって来るに過ぎない。日本の学校で学んでいるからだ。したがって親たちは心配していない。

「子供たちは日本語を話すのですね」

「日本語だけで話をしている家庭もあります。例えば、ジェヴスキ家がそうです。あるいは豊原から三つ目の駅の小沼に住んでいるチェハンスキ家もそうです。そのうち、あなた自身ご覧になると思いますよ」「彼らは日本語をどれほどできるのかね」「悪くないです。文句をつけるほどでもないです。むしろ上手と言ってもいいくらいです」

「本題に移りましょう」

ザハリャシュ修道士は本棚の製本された本の中からサハリンに関するドロシェヴィチの本を取り出した。帝政時代の本としては、これがサハリン監獄の全体像を示す唯一のものであるらしい。サハリン、それは涙と恐怖の島である。

情報が詰まったこの本に私たちは目を通した。当時の写真があった。ロシア人についていろいろと質問をした。ロシア人はもうここにはほとんどいなかった。散り散りになったわずかな家族がいるだけであった。中には死刑囚[流刑囚]の子孫たちもいる。そのうちの二人はもちろんポーランド人である。

ドアの上に日本の天皇の肖像画が架かっていた。その後ろにあったのは十字架と聖人画だけだった。日本では天皇はまだ残っていて、そのおかげでここに送られた人はこれまで生きてこられたのである。死後に神に頼むことはないので、少なくとも生きている間は、半神に頼ろうということなのである。

ザハリャシュ修道士が私の視線に気づいた。

「私たちのこのキリスト者は、何よりもまず日本人なのです。ですから、この肖像画は彼らのためなのです。ここでは皇族に対する愛着や熱狂がどれほど大きいかご存知ですか」会話は彼の個人的な回想へと移っていった。

ザハリャシュ修道士はロシアでの冒険や迫

害にまつわる話を少なからず胸に秘めており、手紙と食糧を持って扮装し、生命の危険を冒しながら、どうやってウラジオストックのシリヴォフスキ司教のところまで辿り着いたかを、詳細に、正確にそして長々と話した。しかしその後で、再びサハリンのポーランド人の話になった。明日すぐに訪問を開始しよう。まず初めに豊原、その後でポーランド人が住んでいる他の駅や集落を訪れることにしよう。

「ピョートルフスキ神父様は、明後日の土曜日には帰っていらっしゃるはずです。日曜日の礼拝式を執り行うことになっていきますから。説教は日本語でなさいます。あなたもお聴きになる必要がありますよ。ミサが終わった後には、ポーランド語でもお説教をされます」

私は何も言わなかった。火が燃え尽きようとしていた。厳しい寒さのため窓の向こうに見える庭は、まるで白い椰子の木が生えているかのようだった。

「ここにはポーランド人神父が三人います。大泊のスタニスワフ・ムハ神父、この島の西岸の港の真岡のパウリン・ヴィルチンスキ神父、そして、こここのピョートルフスキ神父です。ここでは健康は頑強でなければいけません。それは気候ではなく、むしろこれまでとは違った生活条件に耐えることです。ムハ神父とヴィルチンスキ神父は、この国にあまりよく辛抱できているとは言えません⁹。真岡では例えば牛乳はありません。ヴィルチンスキ神父は常に節食しなければならず、深刻な病気をいつも患っています」

その後すぐに言い訳をするかのように、次のように付け加えた。

「ここにいるのは私とピョートルフスキ神父様だけで、神様のご加護で何とかやっていますよ」

私がホテルに帰ったのはもうかなり遅い時刻だった。私はザハリャシュ修道士と明日、豊原のポーランド人家族を二軒[旧市街のジェヴスキ家とボルコフスキ家]訪ねる約束をした。雪の中を私はようやくホテルにたどり着いた。するとホテルでは、女中が全員私の遅い帰りを我慢強く待っていた。

日本人女性の一人が朝と夜の一日に二度やって来る。彼女はひざまずき、頭を低く垂れて告げる。「オフロです」。フロとは入浴のことである。「オ」という言葉は尊敬を表す。日本ではすべてが尊敬されている。特に泊り客(オキヤクサン)に関してはその通りである。毎回「オ」という接頭辞をつけずに、何かを言うことは不可能である。

そこには、ひとつだけ問題があった。しかしそれは根本的なものだった。つまり風呂場へは長い廊下を渡って行かなければならなかった。廊下は、控え目に見積もっても摂氏二、三度という厳しい寒さだった。その代わりにお風呂はなんとか我慢できるほどの熱さだった。浴場には数人いて、ホテルの女性オーナーがその娘と一緒にだったが、そこには破廉恥な点は何もなかった。私たちの考える恥の感覚は日本にはない。それは、一人ひとは多かれ少なかれ同じ体格をしており、下着の下に何を持っているかはあらかじめ分かっているという原則に基づいているのであろう。

特別な振舞いをする必要はないのである。他の人はこの種の問題に関する理に適った、もったもなこのような立場にすぐに慣れていたが、どこか別の場所なら「モラルの侵害」と天に向かって叫びながらの抗議を受けただろう。例えば、私が脱衣するときは、少なくとも女中が一人いて、彼女の助けを私が断ったときは、間違いなく私に対して悪印象を持ったにちがいない。女中は二人や三人でなく一人だけでよかった。表情を維持するためには、理想的な無関心さを保たねばならず、このすべてのことは私にとってしごく日常的で常識的なことであり、これまでそれと違ったことなど一度もないよ

⁹ 私が樺太を去ったのちに、スタニスワフ・ムハは大泊で重病を患い、札幌に搬送されたが亡くなったという情報がもたらされた——原注。

うなふりをしなければならなかった。私はできるだけそのような表情をしようと努め、何とかうまく行った。

もし今朝、風呂場に遅れなければ、私は風呂場で満州国の外交部次長と出会っていたはずだった。彼と親密に話す貴重な機会を失ってしまった。朝食には旅の知り合いの菱沼氏を招待した。夜になると私の所には、ザハリャシュ修道士が来ることになっていた。

(九) ポーランド人流刑者の家

今日はもうそれほど凍てつく寒さではなく、ただ風だけが昨日より強く吹いており、灰色で、低く垂れこめた灰色の雲が、まるで吹雪のようにあらゆる方向から吹き寄せた。

ザハリャシュ修道士は時間通りに現れ、私たちは雪掻きで脇に寄せられた二列の雪土手の間を通過して、豊原の反対側[北部の旧ウラジミロフカ、後に豊原旧市街と称した]の端にあるジェヴスキ家へと向かった。

道中、私は詳しい紹介を受けた。それによるとユゼフ・ジェヴスキ¹⁰は、数十年前にサハリンにやって来て、刑期を務めた後にここに定住し、結婚したのだった。農場を創設し、ジェヴスキ家は現在では繁栄し子供もたくさんいて、日本人からでさえ豊原でもっとも尊敬される住民と見なされているのだった。

話をしているうちに家の前に到着した。そこには、通りに大きく広がる土台のしっかりした屋敷があり、雪の外套をまとい押しつぶされそうになっていた。

玄関と屋敷を抜け、大きくて暖かい部屋へと一直線に向かった。ザハリャシュ修道士は私を紹介し、訪問の理由を説明した。

「この方は、外国にいるすべてのポーランド人を訪ねているのです。だから今回はサハリンにやって来たのです」

この言葉によって急に困惑した状況になった。座るように丁寧に頼まれ、すぐにお茶が出

された。しかし私たちはまだ十分に話をしておらず、彼らは訪問した際とは違って、私のことをますます不思議そうに眺めるのだった。つまりポーランドからサハリンまでやって来るとは信じられない様子であった。このような訪問に慣れている人など誰もいないのである。まして、あらかじめ知らされていなかったのも尚更である。

主人だけがテーブルにつき、私を眺めたが何も話さなかった。白くて鬱蒼とした顎鬚に隠れた彼の口から私が耳にしたのは、純粹で正確なポーランド語の単語の響きだけであった。彼は年配で背も曲がっていたが、年老いている様子ではなかった。壮健であると言った方がいいであろう。夫人¹¹は容姿端麗で、彼より二倍は体が大きく見え、お茶やパンケーキの周りで忙しそうに働き、そうすることによって会話に入ることを断っているかのようであった。

私は、ポーランドからやって来た客人を見に集まった子供たちにだけ話しかけた。小さな子供が二人と十代の子供が二人だった。耳をそば立てると、彼らが話しているのは日本語だった。

そうしているうちに年長の息子が現れた。ジェヴスキ老人は私にすべての子供の名前を言い、手を伸ばして彼の方を指差した。

「この子はフラヌシ[次男フランチシェク]です。」

彼は家の入り口でまず靴を脱いだ。日本の慣習はこの家庭でも採用されているのだ。子供たちは足を組んで地べたに座ったが、老夫妻は椅子を持ってくるようにはっきりと言った。

「フラヌシは何歳だい」と少年に尋ねた。赤面し当惑し、苦労しながら言葉を吐き出した。

「四十歳です」

「十四歳」と老人が訂正した。

子供たちはすぐには理解できず、日本語で数字を繰り返してからようやく笑った。フラヌシはいっそう赤くなった。なぜなら下の兄弟たち

¹⁰ 豊原旧市街に住む牧場経営者、樺太ポーランド人会二代目リーダー。

¹¹ 妻ヴロニスワ。小沼のチェハンスキ家の長女、サハリン生まれ。

が彼を引っ張り始めたからであり、彼は部屋の隅の方に隠れた。女主人がランプを持ってきてテーブルに置いた。屋敷はもう暗くなっていた。

「フラヌシ、家畜の様子を見て来なさい」と、老人は彼に自分の仕事を思い出させた。

使いに出されたフラヌシは靴を履き、毛皮の帽子を被り、棒のついた紙の提灯の中の蠟燭に火を付け、牝牛のところに出て行った。

何か寛いだ雰囲気になった。これまで滞っていた会話が弾み始めた。ジェヴスキは戸棚のどこからか古い色あせた写真を取り出し私に見せた。それはまるでサハリンでの自分たちの歴史について私に示しているかのようであった。そこには帝政時代の思い出が少しあり、それはわずかであったが、しかしもちろん楽しい思い出ではなく、写真は湿気で傷み、何が写っているかははっきりとは分からなかった。さらに家族が巡り歩いている写真があった。それは大部分が葬式のものであり、開いた棺桶の所に全員が集まっていた。

また、結婚式のものも一、二枚あった。一番新しいのは、新しく赴任した駐日ポーランド公使スタニスワフ・パテク(注2参照)と一緒に写ったものだった。それは最も華やかで最も楽しさに溢れていた。植民地に在住する全員が集まっていた。ジェヴスキはまだサハリンにいる人たちを示し、もうサハリンから出て行った人や、亡くなった人を教えてくれた。彼はこの写真の話に長時間留まり、それからようやく会話はポーランドへと移った。サハリンに住むポーランド人が今でも覚えているこの訪問によって、彼らが若いときに追放され、外国に支配されていた頃のことだけを覚えている地域で、前代未聞の出来事が起きていることを初めて理解し、確信し、感じたのだった

人や文書で噂やニュースがやって来た。それによると、ポーランドは(1918-19年に)体制が新しくなり、自由と独立が達成され、ワルシャワが首都になり、今ではロシアや日本と同じように独立国家となったということである。このことすべてをすぐに信じ、このような遠く離れたところで知ることとなった。

ピウスツキという名前を人々は耳にした。こ

の名前は、彼らが住む人里離れたところでも、はじめて聞く名前ではなかった。というのも年配の者なら誰でもブロニスワフのことを覚えていたからである。

最初はみんなそのピウスツキとは、ブロニスワフのことだと思っていた。かなり後になって、ピウスツキの死に関するニュースがやって来た。しかしすでに彼らにとってそれは新しい情報ではなかった。それがユゼフの兄のことだともう伝えられていたからである。

ジェヴスキはこのことをまるで記憶の深い層から取り出すかのようにだった。それによるとブロニスワフは子供を教え、初めは相浜に暮らし、東岸の馬群(潭)に住み、後で内路に行き、その後で白浦村[日露戦争まではシラロキとかシララカと称した]のアイヌ人たちの所で暮らしたのだった。

「一緒に銭湯に風呂に入りに行っただけです」と彼はまるで同意を求めるように言った。

「ブロニスワフは善良で、そして有名人でしたよ」と彼は付け加えた。

「ロシア人もポーランド人も、とくにアイヌ人たちは彼のことをそういう風に覚えていますよ。北部の村に行ったら聞いてみなさい。年寄りみんな覚えているし、知っていますよ」

パテク公使の写真を手に持ったまま、彼は自分に問い始めた。

「当時から何も起こっていない。まるで当時のポーランドに近づくことができるかのようです。唯一の例外はポーランド人の神父がここにやって来たことです。しかし、神父たちはここに三年以上いるので、みんなここにポーランド人神父がいることに慣れてしまったのです。しかし、今ではポーランド出身のポーランド人ではなく、サハリン出身のポーランド人なのです」

奥方と子供たちはテーブルにつき、子供たちはより大胆に、より自分らしく、より打ち解けた様子になった。それはまるで私の姿をよく観察し、私が何を言っているか、どのように話を

しているか聞くためのようだった。しかし彼らが理解しているのは実際半分くらいだということが私にはよく分かっていて、ここに持ってきた新聞の束を開いた。

ジェヴスキは眼鏡をかけ、自分の目に飛び込んできた最初の頁の最初の記事を読み始めた。子供たちは挿絵を眺めていた。新聞は新しくなかった。昨年の秋のもので、写真や記述に溢れていた。彼らが当時のニュースに読みふけるままにしておいた。

(十) 日曜日

サハリンのポーランド人は二つのカテゴリーに分かれる。それは死刑囚や流刑囚のように、一年に二度やって来るオデッサ発の戦艦からの一団と一緒にここに強制的に連れてこられた者たち、そしてロシア革命によりサハリンに投げ出され、ソヴィエトの支配下に戻すという北京条約に基づき日本人が離れるまでは日本が支配していた北部に入植していた人たちである。

彼らは農場やパン屋で雇われた[実際はほとんどが自営だった]。彼らはパンの製造に秀でた能力を持っていたため、駅で到着する列車の乗客に対しパンを販売する権利をすぐに手に入れ、商売は成功した。大泊、新場、北部の白浦など、いろいろな駅でパンの独占販売を行った。さらに北海道でも、例えば旭川の駅で自家製のパンを販売したのは多かれ少なかれミハウ・ラジェエフスキ¹²だけだった。ボルシェビキから逃れ、北樺太にやって来て、次に豊原に入植[亡命]したポーランド人のカジミェシュ・ボルコフスキ[豊原旧市街のパン屋]と私は知り合った。

ザハリャシュ修道士は次の日の日曜日に、私と一緒に小沼には行けなかったので、ボルコフスキが私を案内しようと提案してくれた。そのうちに、ピョートルフスキ神父が帰って来た。私は、ザハリャシュ修道士と一緒に彼に通りで会った。彼らは駅からの帰りだった。ピョートルフ

スキ神父は若くはなく、背も低い、その動きはエネルギーとしなやかさに溢れ、善良な顔と、灰色の深い目の持主で、私の到着を知っていた。夜は布教に付き合っただけで過ごした。ザハリャシュ修道士は夕食の準備に取り掛かった。

ここ二十年間の極東でのポーランド人の生活に興味がある者なら、誰でもゲラルド・ピョートルフスキと必ず会わなければならない。東洋のポーランド人はみんな彼のことを知っている。中国では長江の漢口(はんこう)、その後ハルビンなどで十九年を過ごした。もちろん中国語を容易にマスターし熟達した。中国でおおよそ四半世紀を過ごした 1930 年になってようやく日本語を習い始めた。

当時、サハリンで伝道を行っていたのは、ルヴフ司教管区のフランシスコ会(ポーランドではベルナルド会)だった。1930 年 1 月 25 日にそれはポーランド人に譲渡され、ピョートルフスキ神父が任命された。以前は、ここはポーランド人に敵意のあるシレジア人が支配していた。三人の神父と一人の修道士から編成された最初の一団がポーランドを出発したのは 1930 年の秋で、次は 1931 年 11 月だった。神父たちは最終的にサハリンへと出発する前に北海道の札幌で準備を整えた。それは何よりもまず日本語の勉強だった。

樺太でポーランド人による宣教(布教)が公式に開始されたのは、1932 年 5 月のことだった。神父たちはみな日本語をかなり上手に話した。ピョートルフスキ神父はちょうど翌日の説教の準備を終えたところだった。

三十分の説教を準備するために十時間あるいはそれ以上の時間がかかり、当時はまだそれを暗記して話せなかったもので、読むだけだったと私に話してくれた。今ではもっと簡単に速く準備できるそうだが、そのテキストや原稿を見ると、まだかなり難しいのではないかと思う。彼らは、話すだけでなく、少なくともそれと同じレベルで書いたり読んだりできるように、絶えず語学の勉強をして、自分の語学力を磨いている。彼らは日本語の初等読本、アルファベッ

¹² 旭川在住の亡命ポーランド人(牛島秀彦『もう一つの昭和史 2 風雪日本野球 V・スタルヒン』毎日新聞社、1978)

ト、文法などの本を持って旅行している。というのも他の仕事も決して少なくないからである。ここでの彼らの生活条件は想像する限りきわめて質素なものではないかと思う。多くの場合、かなり低いレベルで生活しているのではなかろうか。ここでの彼らの生活、自己犠牲、そして困難な仕事への献身を、私は驚きと尊敬の念を持って目にした。

私は、豊原カトリック教会[天主公教会]での早い時間のミサに出席した。私は玄関で外套と靴を脱いだ。玄関の間にはあらゆる種類の外套が掛けられ、靴が残されており、私はスリッパを履いて、日本人にとって神社の役割を果たしている部屋の敷居を跨いだ。内部は暖かくて明るく、朝から暖炉が燃えていた。清潔に掃除されたマットの上で、日本人信者の大部分がうずくまっていた。多くの信者は和服を着ていたが、もっと「文明的な」服装をしている者もいた。背中に子供をおんぶしている女性も少なからずいた。これは日本風の子供の抱き方であり、まるで瘤のようである。赤子は広い帯で母親の肩に結びつけられ、頭だけが見えていて、動くたびにあらゆる方向に揺れている。彼らが航空機の仕事や操縦の才能がなく、それは個人的にそうなのでなく、人種的特徴と半ば冗談に考えられているのは、若いときに母親の背中で揺さぶられていたからかもしれない。

つまり彼らが三半規管に損傷を受けたのは、あらゆる方向へ傾く頭が無頓着に揺すられたからだというのだ。これにどのくらいの真実が含まれているか私には分からないが、もし長い間守られてきたこの子供の抱き方の習慣が、空を飛ぶ能力に悪い影響を与えることが証明されれば、国の防衛に適った習慣を作るために、このようなやり方をきわめて厳格に禁止する法令が現れるのではないかと思う。

脇にある二つの小さなベンチに、全員でわずか数人の顎鬚を蓄える年老いたポーランド人やロシア人の一家の長老が腰かけた。私もそこに座った。まるで炭のような黒い髪をした日本の子供たちの間には、明るいブロンドの頭が見えた。ポーランド人の子供たちだ。子供たちは同じように足を組んで地べたに一緒に座った。私のそばには、まるで私たちの村からまっすぐ

やって来たかのようなショールを被った女性がいた。ピョートルフスキ神父は、ミサでは日本語で黙示録を読み、日本語で説教をした。私は理解できなければ理解できないほど、それをますます大きな驚きをこめて聞いた。ミサの後、ポーランド人に対し少し言葉をかけた。そのうちに、ザハリャシュ修道士は、めったには集まらない彼の弟子に会えるように私を呼んだ。ここでは時々ポーランド語の授業があるという。

ここには新場のルボヴィエツキ家[新場駅のパン屋]と小沼のチェハンスキ家の子供たちが来ていた。彼らはいつもの日曜日と同じように両親と礼拝式にやって来たのだ。

ザハリャシュ修道士はこの機会を利用して、ミサはほとんど終わろうとしていたので、ポーランド語の授業のために子供たちを集めた。子供たちはザハリャシュ修道士が好きで、喜んでここにやって来ていた。しかし残念ながら両親たちはこの勉強の利益をきちんと理解しておらず、まるで神父の影響を受け入れるのではなく、強制的にすべての子供たちに画一的な日本の学校教育に甘んじる準備ができていたかのようであった。日本の学校に通うことによって、子供たちは日本人に完全に馴染み、日本語のみ書いたり読んだりし、小さな時から自分をほとんど日本人だと思えるようになるのだ。しかし日本人たちは彼らを、決して自分たちと同じ日本人だとは思っていないのである。

ポーランド史にまつわる絵が掛けられた明るい部屋には、本の詰まった本棚が壁際にあり、すぐ脇の机の前では小さな子供たちが座って、修道士の監督のもとでポーランド語の本からテキストを書き抜いている。子供たち、特に女の子たちは綺麗かつ丁寧に書き、彼らの上達と熱心さに、ザハリャシュ修道士はいくら喜んで足りぬといった様子だった。

私が行ったことで少し困惑させてしまったようで、彼らはポーランド語を話したがらなかったが、最後にはみんな何らかの文章や、詩を読んで自慢したがった。ザハリャシュ修道士は彼らがたまにしか来ないので、勉強に継続性がないことだけを残念がっていた。しかしポーランド人神父らがやって来てからは多くのことが改善された。以前にはポーランド語に対する

意欲も授業もなかったからである。今でも家庭では日本語かロシア語が使われている。

するとボルコフスキ[豊原旧市街のカジミェシュ]が現れ、小沼への列車の時間だと言った。チェハンスキ家の子供たちはすぐに出て行った。私たちも集合して、毛皮の外套を着用し、帽子を耳に押し当てた。雪が降り始めた。

(十一)小沼

列車で半時間だった。その集落は線路のそばまで広がり、まるで半分は雪中に埋没したかのように見えた。雪も豊原より多めらしい。ボルコフスキの助言に従って、出発の前に買い求めたオーバーシューズが、ここではとても役に立った。というのもここでは、ひとは膝までが雪に埋まりながら前に進み、場所によっては完璧に埋没してしまうからである。

道中、ボルコフスキと四方山話をした。彼はアメリカに兄弟がいて、もう二年も会っておらず、彼に関する情報も何もないとのことだった。

そうこうするうちに、小沼に住む最初のポーランド人を訪問することになった。小沼は比較的新しい名称で、それ以前は「ノーヴィ・アレクサンドロフスク」[ノヴォ・アレクサンドロフスク]と呼ばれていたが、さらに以前の当初には「ポポヴェ・ユルティ」と称された。

それはユゼフ・コスティラの家であり、彼は自分で敷居から雪を掃き出していた。強壯で顎鬚を蓄えた老人はすでに私の到着を承知しており、愛想よく私を招き入れた。二つの小さな部屋はとても貧相で汚かったが、コスティラ家はサハリンで一番うまく行っていないとボルコフスキから事前に聞いていたので、私は驚かなかった。主人はポーランド語が下手だったので、私たちはロシア語でコミュニケーションを取らねばならなかった。彼がここに送られたのは二十六歳のときで、つまりそれから四十年をサハリンで過ごしたことになる。妻はポーランドのトロヤノフ、現在のルベルスク県に置いてきたとのことだった。

しかし、ここサハリンではチェハンスキ家の娘[次女マルツィアンナ]を二番目の妻にしたのだった。ボルコフスキはこのことを私に告げ、

コスティラの二番目のサハリン妻は自分が奪い、現在も一緒に住んでいると率直に語った。コスティラが金持だった頃、ボルコフスキは農場の助手として雇われたのだが、後で妻はボルコフスキと申し合わせて老人の所から一緒に出て行った。ボルコフスキと彼女は新しく自分たちで働き始めた。この時期からコスティラ老人はお金を失い、酒に溺れ、自分の家で何とか生き延びているだけになった。

「ひどく悲しいだけです」とまるで結論のように、コスティラは私とボルコフスキに言った。

「息子は軍隊に取られました。帰って来るのをここにひとりで座って待ち続けるだけです」と彼は付け加えた。

彼に息子がいたのだろうか。息子に関しては、後で分かったのであるが、日本人の孤児の男の子を、わずか三歳のときに養子にしたそうだ。この子は老人よりも上手にポーランド語を話す。ロシア語も話せる。洗礼名はスタニスワフで、日本の名前はオノブ・サイチという。コスティラは引き出しから何か紙のようなものを取り出し、制服姿の男の子が写っている写真をそこから抜き出した。彼はそれを私の目の前に差し出して、誇りを込めつつ活気づいて言った。

「これが息子です」

彼に別れを告げた。次を訪問する時間になったからである。彼はまた戻って来るように、自分のことを忘れないようにと頼み、ポーランド語を忘れたことについて謝罪し、私たちを敷居まで送り、私の訪問中にまた厚く積もった雪を箒で掃き始めた。

ボルコフスキは私に、コスティラの妻との顛末について補足し、説明し続けた。それに対し罪の意識と、私の前でそれを正当化する必要性を感じているようだった。

小沼にはチェハンスキ家が二軒[長男アントンと次男ヤンの家]ある。両家とも流刑者の息子で、両家とも大工である。彼らは自力で家を建て、二軒の家は見たところ、二つで一つのように見える。その木造家屋は、強靱な松の丸太と板で作られ、地面にしっかりと土台を置き、

風や雨に対し耐久性があり、悪天候から守られていて、居心地がよく暖かい。風通しがよく、かろうじて暖房されているに過ぎない自分たちの家からここにやって来る日本人は、しばらくすると、すぐに眠り始める。このようにやって来てすぐ寝るということはよくある。

ヤン・チェハンスキは、ちょうど数日前に妻に捨てられた。妻は他の男と出て行ったのだ。したがって、数歳のまだ幼い娘と二人きりでいて、少し心配し、少し機嫌が悪かった。隣人たちは彼を慰め、助言を与えるかのように眺めているものの、実際はただの好奇心に過ぎないことをよく理解していたからだ。彼の家族の話は小沼中を駆け巡り豊原にまで達していた。

その反対に、アントニ・チェハンスキのところでは、何もかもが一番いい状態だった。子供は六人いて、妻は家事に長け、家を守り、子供の面倒を見、もし私の目に狂いがなければ、間もなく夫に七番目の喜びを与えることになるだろう。

部屋全体に日本の新聞が貼られ、そのおかげで地面の熱がよく維持されていた。窓のそばには、まるで看板から取ってきて壁に貼られたかのような日本の歴代の天皇の肖像画が貼られていた。卵型の頭をした赤ら顔の彼らが油絵石版画の中からこちらを眺めていた。その隣にはどこからここに辿り着いたのか分からないが、1919年にアメリカで発行された、司令官と勝利者の後光に包まれたピウスツキ元帥のポスターがあった。

ベッドの上の壁には、長女(八歳)が描いた自家製の絵が掛けられ、それはベルベデル宮殿の前でベンチに腰掛けるピウスツキ元帥のかなり有名な肖像画を写したものである。その肖像画ではピウスツキはベンチの横に立つ夫人と、木からリンゴを取っている娘たちと一緒に描かれている。これはかつてポーランド系アメリカ人の雑誌に掲載された、画家のグロテスクな空想に溢れた作品である。チェハンスキ夫人と子供たちは、私がポーランドの絵に気付いたことをとても快く思っているようだった。

しかし、会話はロシア語以外で行うのは不可能だった。ポーランド語を話そうとするのはとても難しい様子だった。ザハリャシュ修道士の

尽力のおかげで、子供たちは私のことを理解できたようだった。

彼らは、時々ロシア語の言葉の後にポーランド語の言葉を突然続けたりした。お互いの間では日本語で話をしていて。どこか用事から夫が玄関に帰って来て、敷居で靴を脱ぎ、外套から雪を払い、私の方へ固い力強い手を差し出した。私たちは珈琲を飲み、話を始めた。農場をたくさん所有し、仕事は十分にあり、問題がひとつもないことに満足していた。

サハリンでは、彼らのうちの誰も自分の土地を所有していないし、所有できないという、既にジェヴスキが語ったことを、彼は裏付けた。賃借りするだけで、契約は三年ごとに更新されるという。日本人は、日本人を小作に雇うように説得するのである。したがって、ポーランド人たちは今やポーランドのパスポートを持って生活している。日本人も彼らの価値を評価する方法を身につけている。つまりパスポートによって「ロシア人」と区別するのだ。かつてはみんな「ロシア人」だった。

「ロシア人」は、ポーランド人とは異なる価値の劣る階級である。例えばコスティヤは自分のパスポートを新聞の束に丁寧に包み、私に渡すとき、私がそれを彼から盗むのではないかと恐れながら、私の手に置いた。というのもこれは彼が所有しているもののの中で最も価値のあるものだからである。

チェハンスキとさらに会話を続けた。

「土地は自己所有させてくれないのですね」

「とんでもないことです。土地はわれわれ日本人のものだということです。土地を求めて私たちは闘いました。お金を出しても今でもまだ無理です。もちろん賃借りはできますが。しかし、それはこのポーランド人を苦しめています。今でも問題です。自分たちの土地を持たないことが彼らに嫌な気持ちにさせています。そうすると人は頑張ってあくせく働かなくなります。すべて他人のものになるのですから。これは最悪で残念なことです¹³⁾」

チェハンスキの農場へと話は移った。百五十平方サージェニ[1サージェニ=2.134メート

ル]あるとのことである。牝牛を十八頭所有し、牛乳を販売している。馬を一頭役畜として所有し、ブタを二頭飼育し、雄豚は市場で販売する。燕麦を蒔き、ジャガイモを植えている。裏庭の菜園では野菜も栽培する。かつてロシア時代には、大麦や小麦まで育てていた。サハリンには製粉所があった。今では製粉所はない。というのは、日本人はパンを食べないので¹⁴、必要ないのである。今では小麦粉は南[本土]からパン屋が運んできている。

チェハンスキは農場の雑事についても私に紹介した。

「放牧地は共有で政府の管理なのです。家畜の頭数に応じて支払いがあります。政府の木は幹単位で販売され、自分たちで森に行って購入した木を伐採します。最も儲けになるのは家畜です。ジャガイモは価格が低すぎます。豊原ではようやくアルコール蒸留所が建設され、アルコールが出回っています。秋には、まだ新年の前だということに戦争についての話がされていましたが、その後はそうでもありませんでした。

戦争は不幸をもたらしました。ロシア人が北からやって来たときのように、日本人は自分たちのものを持ち去り、ロシア人が最初に殺すのが私たちであるようにするため、私たちを残しておいたのです。税金は日本人より多く払わねばならず、植民地への予算として政府は今でも絶えず税金を要求します。子供たちは日本の学校へ通うことを強制されます」

その後、土地と雪のことを話した。そして昨年亡くなったばかりの父親の話となる。その後、突然、最後に厳かにそして感動した様子で、初めて私に質問をした。それはポーランドに関する質問であった。彼自身はサハリンで生まれたとのことだった。

(十二)大宴会

黄昏時の直前に私たちは短時間で駅へと戻った。ルボヴィエツカと結婚したムリン¹⁵の家に途中で寄った(ルボヴィエツキ家は新場駅の近くに住んでいた)。ムリンはロシア人だったが、三人の娘すべてをポーランド語で教育を受けるために豊原に送っていた。彼は、帝政時代、サハリンに対するツァーリの支配が戻って来るとは信じていない人間の一人であった。子供たちにとって日本の学校は不十分であった。母親がポーランド人で、ポーランドに関してはポーランドが強国であり、発展しているというニュースがサハリンまでも届いたので、子供たちにポーランド語で教育を受けさせていた。

小沼にはさらにチェハンスキ家のマリアナ[三女マリア]も住んでいた。彼女は日本人の古川(フルカワ)[七治郎]の許へ嫁ぎ、彼との間に数人の子供がいた。子供たちはもうすっかり日本人だということであった¹⁶。

駅では吹雪がいつそう激しくなっていた。それは雪嵐だった。雪の中に埋まった駅への道の途中で、歌を歌う行列に出会った。その行列は遠くから見ると、疎らな百姓屋の彼方の荒野で、吹雪と黄昏の中で姿の霞む亡霊のように見えた。それは村の少年たちの一人が軍隊へ行くのだと分かった。彼はすでに新兵の制服を着用し、この習慣に倣って村全体が彼を見送っていた。見送りの人々は手に旗や楽器や、あるいは縦に文字を書いた細い紙束や絹の布を結びつけた棒を持っていた。男の子の旅行のために郡全体が出てくるだけでは十分ではなく、出発の日には盛大な祝日となるとのことだった。

雪に埋まった駅のホームに立ち止った。彼らは旗を手に、とてもカラフルな着物や上着を身にまとうから、白い雪を背景とする雪の上では、ウォヴィチ[ポーランドのウッチ県の都市]の人々や昔話の登場人物らのように、赤が中心な

¹³ 当時の記録によると、樺太ではポーランド人はロシア人のような凶悪犯ではなく、政治犯と位置づけられていた(寒川光太郎『露囚物語』ぷらや新書刊行会、1968)。

¹⁴ 常食でなかっただけで、彼らのパンは各駅で大変人気があった(樺太庁編『樺太写真帖』1936 他)。

¹⁵ 小沼の残留ロシア人ニコライ・ムリン(Сергей Федорчук, *Римско-Каторическая Церковь на Сахалине*, 1998)

¹⁶ 古川家には春子、年子、幸子の三人の娘がいた。幸子は豊原高等女学校を卒業している。

がさまざまな色調の明るい斑点となって見えた。列車がやって来ると彼らは叫び始めた。「万歳」という言葉が百回くらい響いた。これは「一万歳」という意味である。この伝統的な儀式全体は、日本人の生活における軍隊、軍隊の精神、および戦争全体を理解し知るためのほんの一部分でしかない。

私たちは列車の中で、ジェヴスキの長男ヴィクトル¹⁷に出会った。彼は北の白浦からの帰りだった。そこにいる義理の兄アダム・ムロチコフスキ¹⁸の許で数日を過ごしたのだった。豊原に着いた私たちは彼と一緒に、一夜を過ごすべくジェヴスキ家に赴いた。そこにはあらゆる種類の食べ物すでに用意されていた。

それはソーセージ、ビゴス、さまざまな種類のたくさんの肉であった。つまり大宴会だった。ボルコフスキは妻[マルツィアンナ]とやって来た。

隣人のロシア人でポーランド人女性と結婚したレコンツェフ¹⁹もやって来た。ジェヴスキの子供たちもみんなそこにいた。つまり長男のヴィクトル、十代の娘のカタジナ、年下の息子のフラヌシ、そして六歳から九歳までの三人の幼い子供[カーチャ、マリア、マーゴ]がいた。

ウォッカまで振舞われたが、それは男性に対してだけであった。隣に座っているジェヴスキと私は、なみなみと注がれたグラスをすでに何度か合わせた。

晩さん会ではヴィクトルが蓄音機をかけた。日本製の二、三枚のレコードがあり、その中には米で出来た日本のアルコール「サケ」にまつわるジャズの歌もあった。それは日本では今でも一番人気のある曲で、どこでも耳にする言葉で始まる。

「サケ・ハ・ナミダカ！ タメイキ・カ！ コ
コロ・ノ・ウサ……」

その後、突然、ポーランドからの客人である私に対して、嬉しいもてなしがなされた。ポー

ランドの歌である。これは私が樺太遠征中に会ったものの中で、もっとも予想していなかったことであった。そのレコードそのものに歴史があった。これはアダム・ムロチコフスキ宛に、ポーランドの親戚が郵送した最新のレコードだった。道中何枚か割れたが、六枚が安着したとのことだった。どれほど嬉しく、どれほど盛り上がったことか。三日間、誰も蓄音機から離れようとしなかった。今では、使いこまれて古くなり、擦り切れている。しかし、いまだにそれを喜んで聴いている。

私は、マズルカとポルカを聴いた。オベレック[ポーランドのフォークダンス]、ヘン・ドマンスキの歌うクヤビャク[同]、最後には「海の瞳」からの一曲が入っていた。これは婚礼歌で、会話と音楽と歌が入っていて、そこではヴァルテルが主役を務めていた。このレコードは他のものを押しのけてかけられた。一度聴いただけでは十分でなかったの、よく覚えられるように二度、三度聴く必要があった。

私は突然、リトアニア、トルキスタン、ロシアなどでの経験が記憶に蘇ってくるのを意識した。そこではポーランドのラジオ局の電波が届かなかったが、ポーランドのいいレコードがその土地や職場を支配していた。

ここでは、世界の最果ての雪に埋没する家の中で、その価値と影響を突然理解したのである。家での会話もポーランド語ではなく日本語で、生活もポーランドとは異なり、ポーランドを遠く離れてからかなり時間が経っていて、彼らにとってポーランドはもう存在していないにも等しく、外国か非現実の国になっているにもかかわらず、レコードの歌の歌詞を暗記して、歌い、内容を理解し、何度も喜んでそれを繰り返しているのだ。これらのレコードはそういった役割を果たした。

ここでヴィクトルはアコーディオンを取り出し、オベレック、マズルカ、クヤビャクを演奏し、ボルコフスキはあたたかもジェヴスキ夫人

¹⁷ ジェヴスキ家には十五人の子供が生まれたが、年長男子はすべて死去していた。

¹⁸ 北サハリンからの亡命ポーランド人。ジェヴスキ家の長女スターシャの夫。

¹⁹ セルゲイ。1920年代に北サハリンから亡命したロシア人陸軍将校。豊原駅前商店街で洋服・洋品店を経営し、樺太全域に販路を広げて財を成した。

をさらうかのように、彼女の帯をつかみ、オベレックに合わせて足を強く踏み鳴らし、反対回りや交代しながらひざまずいて踊ったりした。その後でポルカ、シュタエル[ポーランドのフォークダンス]を踊り、この百姓屋が揺れ、心臓が膨れるほどであった。踊ったのは彼一人ではなかった。ロシア人のレコンツェフは彼から、自分のゾフィア[チェハンスキ家の五女ソフィア]をどのように振り回せばよいかを習った。ヴィクトルは踊れなかった。レコードを耳で聞いて演奏し、足で拍子を取っていたからである。しかし私も、ジェヴスキ夫人の娘と踊った。彼女は少し恥ずかしがり屋だったが、何度かボルコフスキ、そして自分の兄弟と踊っていた。ボルコフスキは後日、彼女とクラコヴィアク[ポーランドのフォークダンス]をデモンストレーションで華麗に踊ったほどである。

この見世物[ダンス]に日本人を招待すると、彼らは驚いていた。ボルコフスキのダンスの動きや、ファンタジーのスピードと活気が大変気に入った様子だった。これまで生きてきて、こんなことなど見たことがなかったのである。このようなリズムも、このようなメロディも聞いたことがなく、頭を振りながら驚いた。そしてついには、彼らはどんな楽器でも一度も習わずにダンスに足を合わせながら演奏しているヴィクトルに嫉妬するくらいだった。ポーランド語では理解し合えなくても、音楽でなら相手のことが分かるかのようであった。

新たな出会い

新場のルボヴィエツキと大泊のマジェンダ老人を訪ねた。ピョートルフスキ神父が案内してくれた。駅の上手の丘に建つ二階建ての大きな家で、ミハウとユゼフのルボヴィエツキ兄弟が一年前に建てたばかりで、この集落全体で一番大きかった。農場がすぐ隣にあった。収入はパンの販売からだけではなかった。遠くには雪の上に、銀狐の飼育場と、針金の網を張り巡らした檻が列をなしているのが見えた。ユゼフは毎年、海に出かけ、サハリンのコケモモも販売し

ていた。

「最近は何百樽売れましたよ」

私はピョートルフスキ神父と出かけた。彼はここでのポーランド人の生活について、とても熱心に紹介してくれた。珈琲が用意された大きな部屋にはチェンストホーヴァの聖母の隣に、モシチツキ大統領とピウスツキ元帥の肖像画が架かっていた。この家ではロシア語が話されていたが、兄弟の一人はハルビン出身のポーランド人女性、ゼナイダ・ヤンキェヴィチ²⁰を妻に迎えていた。初めからポーランド語をきちんと守ってこなかった。ヤンキェヴィチはハルビンでは自分のポーランド人的なものを大切にしてきたが、ここ樺太では疎遠になり、ポーランド語で話をするのが難しくなり、最後にはロシア語になってしまった。

他の人のように、日本語だけで話すようにはならなかった。ルボヴィエツキは零落しても、やがて子供たちが自分たちを支えてくれるように、自分の娘を日本人の嫁に出そうとしていた。娘は日本人の夫の前でひざまずくだろうか。そうは思えない。ここの子供たちは、ザハリャシュ修道士の最も熱心な生徒であり、やがてポーランド語を話すようになるだろう。

彼らは私が持ってきた新聞に喜んだ。ニュースに皆が喜んだ。難しいにもかかわらず、私と全く同じようにポーランド語を話すことを自分に強いていた。二人のルボヴィエツキ兄弟の母親である、ルボヴィエツカ老夫人はポーランドの村出身の貧しいが気高い女性であり、サハリンに来てようやく流刑者であった夫のもとに嫁ぎ、ひとつのことにこだわり固執していた。それは自分が生きている限りは、子供たちが、神が命じたように自分の言葉であるポーランド語を話さねばならないということである。他の言葉では子供たちとは決して話そうとしなかった。

昨年、彼女はここ樺太、つまり祖国からはるかに離れた土地に葬られた。最後まで彼女は祖国に帰れると思いをしていた。しかし彼女の言葉と願いが、孫にとっては遺言、命令とな

²⁰ ハルビンの教会施設から来たジナイダ・ルボヴィエツカ。

った。つまり孫たちは、これからもポーランド語を話していくだろう。話すのだろうが、いかに上達するかが問題である。

ルボヴィエツキ家には第三のポーランド人、イグナツィ・キチマフ・ヴェル・キチマンが住んでいた。彼はピョートルクフで生まれ、幼年時代からサハリンに住み、狐の世話をして農場を手伝っていた。彼も子供たちとポーランド語で話をしていた。彼はソヴィエトの占領から逃れて、島の北部からここにやって来たのだった。

北樺太にはポーランド人が少なからずいるということだった。とりわけアンドレイ・イワノフスクとアレクサンドロフスクには多くいるとのことである。彼らに何が起こったかは誰にも分からず、恐らく流刑されたということだった。唯一分かっているのは、現在まで残っているのは、ヴワディスワフ・スカウチンスキだけだということである。

ルボヴィエツキ家の玄関では、樺太に残っているロシア人流刑者二人のうちの一人に会った。その人物は何とか足をひきずって歩いており非常に疲れていた。この老人はルプキンといい、殺人のために終身刑を受けてここに流刑されてきたのだった。日本人がやって来てから、すでに彼は自由の身になったが、まるで自分の刑期に忠実であるかのように、樺太を見捨てずにここで自分の生涯をまっとうしようとしていた。

ルボヴィエツキによると、彼は数年前からひとつの妄想を抱えているということだった。つまり豊原から大泊まで徒歩で歩いて、道中のよく知っている人の家に泊まり、そこでは階段の下の玄関で一晩過ごすというのだ。翌日の朝には彼は出て行く。

「どうして、どこへそんなに急いでいるんだい、ルプキン」と聞かれる。

そうしなければならないからと彼は答える。それには説明がない。そうしなければならないから。

「一カ月に二度そういうことがあり、わが家にはすでに一度道中にやって来ました。ちょうどそれが今日でした。明日の明け方

には、もう出て行くのです」

大泊で立ち寄ったマジェンダは、1903年の最後の流刑囚の一団とともに、サハリンへやって来たのだった。

「何のために来たのですか」という質問には彼は答えなかった。ただ次のようにぶつぶつ何か言っただけだった。

「何かいいことのためさ。悪い事なんかのために来たりするもんか」

彼は私の訪問をととても喜んでいるようだった。会話の中で何度も、これは驚きですな、嬉しいですな、ポーランドの人にもう会えるとは思ってもいませんでしたと言った。

人から離れて暮らし、少し変人であったが、日本人の女性と暮らしていた。神父たちもこの状況を正常化したり、合法化したりすることはできなかった。老人は頑固で、何の話もできなかった。彼にとってそれは困難だった。ポーランドの古風な口髭を生やし、彼の顔は干からび、細かな皺で覆われ、苦悩に溢れ、血の滲んだ目をしていた。

「目は最悪なんです。老いにやられてしまいました」

ポーランド語を使うことはめったになかったし、使う機会など一度もなかったと言っていたし、いくらだったが、申し分なく覚えていた。ルブリンで暮らす子供たちの話をした。孫もいるとのことである。彼らは文通をしていた。婿と機械技師の息子がいた。

「そこに行きたいという考えと闘っています。でも出発することはできないでしょう。ただそう望んでいるだけなのです。子供たちは、私がパスポートを手に入れるなら、少なくとも後一年は私の健康は持つと書いています。そうすればルブリンに私は……」と彼は言った。

彼は言葉を詰まらせた。彼の願いは非現実的で、彼がすでに数年暮らしているこの家では不可能に思えたのだろう。というのもここからルブリンへは数千マイルもあるからだ。

私が差し出した手をつかみ、彼は長い間笑いながらその手を握っていた。

彼の目はじっと私に突き刺さり、それはまるで、光が足りないために病んでひどく赤い目を大きく開けているようだった。病気のためなのか、それとも老齢のためなのかは分からないが、私たちが別れる前、落ち込んでくたびれた彼の頬の上を大粒の涙がこぼれおちた。

(十三) 北へ

列車は朝とても早く出発した。しかし駅にはすでに菱沼氏と警察官と地元新聞『樺太日日新聞』のカメラマンが来ていた。

現地の新聞は初めから私の旅行に、バランスを欠くほど大きな関心を寄せていた。すべての私の動きと詳細について定期的に新聞に掲載し、記事についても、驚きに値する協力の精神から電話で私のホテルに知らせてくるのだった。その報道によると、私は、初めは一人で大使と領事を兼任するとされ、その後には秘密任務を帯びる人物となっていた。最終的には、私は特別に派遣された新聞の論説委員という謙虚な役割に落ち着いた。

ジェヴスキの子供たちは、日本の新聞に載る私の記事をすべて読んでいた。私もそれを通してようやく、自分自身に関してこれまで知らなかった、多くの奇妙な真実を知ることとなった。ただひとつだけ問題があった。つまりそこで書かれている謎の使命である。極東への一回の旅の中で二度もスパイであると吹き込まれたり、立証されようとした者にとって、そして、このような非難と疑いのもとで、この地域で働く私のような者にとって、それらは冗談ごとではなく、だれかの疑いを軽視することがいかに危険であるかがよく分かるのである。したがって、私は地方新聞の特派員に対して、すべての秘密、そして自分の顔さえも、不平を言ったり条件をつけたりせずに明らかにしたのである。それらの秘密は警察にも言及しなかったが、北方の島の秘密に通じている数少ない経験豊かな人であり、私を案内してくれた菱沼氏に関しては何も話さなかった。

遠方の丘の尾根に沿って伸びるすべての土

地は雪に覆われていた。島の南方には、かつてサハリンを有名にした森林がまったく残っていなかった。すべて伐採されたのである。樺太には八つの製紙工場があって、数ヘクタールの樹木を伐採した。しかしすべての樹木を台無しにしたわけではなかった。すべてを呑み込んだのは山火事である。毎年夏になると広大な範囲で森林が燃えると聞いた。ようやく最近になって、荒廃した空間や空き地に対する植林が始まったという。それはおそらく、日本の農林省の飛行機が島に飛来して、測量を行い、写真撮影を行って地図を作製して以降のことである。

ここで日本人の間に広がる貧困は深刻だと聞いた。例えば、大泊の製紙工場は一年半前から閉鎖されていて、労働者が解雇されたものの、その全員が、森林が開発され仕事が豊富で稼ぎも悪くない北部で仕事を見つけたわけではないということだ。

しかし、樺太は、村や仕事に関する限り、例えば北海道よりは良好といえる。北海道からは人が豊富な仕事を求め、群れをなして北方へと移住している。貧困についてはあまり語られないし、表面的には見えない。私が受けた説明によると、当地では信用貸しのシステムが広まっているとのことである。その結果、みな、返済するには人生一つでは足りないほど借金にはまっているとのことである。今では職に関する問題がますます深刻となって、村には経済危機が広がり、村の家族、日本人家族の目の中にも飢餓が見え隠れするのである。しかし今のところ彼らは何とか生きていようである。問題は、期間がはっきりしないにもかかわらず、金を貸したがる者がいるかどうかということである。

窓からは、雪に覆われたツンドラの空間がよりはっきりと見えた。とりわけ今日は氷に覆われた白鳥の湖の周りが見えた。そこは春になると白鳥が舞い降り、そこを巣にして滞在することである。ツンドラの幻想的な風景は、果てしなく広がる開墾地と、ひろびろとした荒野を見せてくれる。そこには、枝をもぎ取られて弱々しく細々とした矮小な木の切り株がいたるところで突き出ているだけだった。雪に覆われた丘に風が吹き付け、どこかの駅で孤独に停車していた列車の窓を叩き、荒野の中にいるの

だという感覚をいっそう強くし、その感覚はまるで厳しい寒さのように私たちの心の中に忍び込むのだ。雪煙が舞い上がる中で、私たちは列車の車両内で、全員が鉄製のストーブの周りに集まっていた。列車は島の東岸にますます近づき、遠方の開かれた水域が、地平線全体をくっきりと浮かび上がらせながら、蒼い筋となって煌めいていた。オホーツク海である。

私たちの目的駅である、アイヌ人の村がある白浜まではまだいくつかの停留所があった。菱沼氏は私に、日本人がブロニスワフ・ピウスツキをどのように知り、どのように語っているかについて紹介し始めた。自分の義弟の著作でブロニスワフのサハリン滞在に捧げた一章について物語る。

ブロニスワフ・ピウスツキの氏名は日本人が発音すると、プロニスラフ・ブリツキのようになるという。彼は毎回そのように発音していた。

この妙な発音に耳がだんだん馴れてくると、今度は彼にまつわるエピソードのみに耳を傾けた。ブロニスワフ・ピウスツキはモスクワ大学の人類学と民族学の教授だったと、菱沼氏は日本語で熱く、そして隈なく説明する²¹。彼は革命運動に参加したため政治犯としてサハリン南部に流刑され、そこで長年アイヌの原住民の間に生活し、シンキンチョという名のバフンケ村長²²の美しい(ピリカ)娘であった十八歳の女性(アイヌ語ではメノコ)と結婚した。

この愛の物語には多くの紙幅が費やされた。著者はこの話の全体を広く理解し、日本人に対しエキゾティックな後味を持たせる短編小説の形式に仕上げた、と菱沼氏は語る。そのことすべてに、日本人はとても大きな興味を寄せたという。とてもロマンティックな物語である、と彼は付け加えた。

日露戦争後の政治状況により、ブロニスワ

フ・ピウスツキはサハリンを後にせざるを得なくなり、もう二度と帰って来ることはなかった²³。彼の死に関するニュースが数年遅れてパリからサハリンに届いた。

しかしサハリンでは、人々の間で彼に関する最良の思い出が生きていた。彼の娘はアイヌ人の許に嫁に行き、今では四人の子供の母親になっているという。しかし、菱沼氏が言うには、子供たちの顔はアイヌ風ではないとのことである。前回サハリンを回ったときに、彼は子供たちに会ったらしい。子供たちが誰に似ているかは明らかである。

「私のアイヌ人の親友の助けを借りて子供たちを探し当てましょう。シンキンチョ²⁴もまだ生きていますが、ただ目が見えなくなっています」と彼は告げる。

列車が近づきつつあった白浜は、現在ではサハリンの東岸にだけわずかに残っている純粹なアイヌの村の一つであり、そこでは日本政府が残りの原住民のために住宅を建設し、それ以前は島全体に広がっていたすべての原住民をそこに送り込んでいるという。原住民らを人為的に集住させたことから、彼らの習慣と言語は消滅しつつあり、みんな急速なスピードで日本人化している。それに最も大きな影響を与えているのが日本の学校であり、子供たちが学校では日本語だけで教育を受けることを強いられている。日本社会への同化過程は一世代で完了しつつある。アイヌ人は、モンゴル人、マレー人と並んで日本民族の第三の構成要素であった。彼らは太平洋の底深く、つまり大昔に沈んだ「東のアトランティス」大陸の住民、即ち、絶滅した祖先民族の生き残りなのである。

これはヴァツワフ・シェロシェフスキの考えであり、シェロシェフスキはブロニスワフ・ピ

²¹ 情報源は能仲文夫『北蝦夷秘聞』(注7参照)であり、不正確な情報が少なくない。ブロニスワフは、実際はサンクトペテルブルグ大学法学部に入ってから半年で流刑になっている(「年譜」参照)。

²² 東海岸白濱コタンの村長(日本語文献では「酋長」「東海岸の酋長総代」とも記された)。バフンケアイヌとも伝えられる。日本名は木村愛吉。シンキンチョは、実際は彼の姪であり、養女に当たる。

²³ ブロニスワフは1903年9月に樺太アイヌのシンキンチョウ/チュフサンマと結婚したが、日露のポーツマス講和条約締結直後の1905年9月にサハリンを離れ、妻子と「永久に訣別」した。

²⁴ ブロニスワフの妻の名を、ヤンタ・ポウチンスキは後出のように「キムラ」「シラカワ」「ジュサウンマ」とも記すが、また「シンキ」「チュフサンマ」という名も伝えられている。

ウスツキとともに、1903年と1904年にアイヌ人の居住地[北海道]を学術踏査したのだった²⁵。シェロシェフスキはアイヌ人のことを周囲の黄色人種で毛のない民族とは異なる「毛深い人々」と呼んでいた。当時の学術踏査は、日露戦争が勃発したため北海道の一部にとどまった。彼らは当時すでに、アイヌ人の人類学的特質が、異質な要素、とりわけ日本人の要素が混じることによって、ゆっくりと消滅し、日本人と人種的に融合される危険性があることを指摘している。アイヌ人の特徴である多毛性は、黒い髭となって多くの日本人の顔を飾っている。これらの日本人にそれ以外のアイヌ的要素はまったく見られないという。

アイヌ人が数千年前から住んでいるここサハリンでは、蝦夷つまり北海道よりも、自分たちの行事、習慣、踊り、特に、有名な熊祭りの消滅がよりいっそう顕著である。熊祭りに関して言うと、アイヌ人は熊を神と見なしており、熊を幼時から飼育した後に、荘厳かつ複雑な儀式を執行して、その中で熊を痛めつけ、殺害するのだ。それはシャマン祭祀や秘儀のようなもので、多くの血とアルコールを伴う。

この太古より伝承された慣習は、風変わりな異教的儀礼によって特徴づけられるが、その消滅の第一因は、クマが南樺太では完全駆除されたことにある。

アイヌ人の言葉と慣習の謎を完璧に理解していた数少ない白人の一人が、ユゼフ・ピウスツキ元帥の兄、プロニスワフ・ピウスツキだった。彼はアイヌの王とも称された。

彼はこの善良で穏やかな人々と心で結ばれ、彼らのために働いた。彼は今でもアイヌ人の記憶の中で愛情に包まれて生きている。

(十四) 白浜

「ここでは彼のことをよく覚えていますよ。わしらと本当に長い間一緒でしたから。わしらにとってはよき友人であり、善良で気高い人でした。わしとわしの親戚に数年

間、教育を施してくれました。可能な限り、すべての人を助けていました」

この親切で愛想のあるアイヌ人は、白川仁太郎(シラカワ ニタロウ)[栄浜の消防団組頭]という。濃くて黒い剛毛を生やした顔の持主であるが、私たちは、[白浜]駅から村への道中で、雪に埋まりながら出会った。菱沼氏は以前の滞在の際に彼を知り、すぐに知り合いになったという。両人は日本語で会話するが、アイヌ人とのおしゃべりの中ではピウスツキという名前が何度も、純粹で正確な発音で繰り返された。菱沼氏は何のために私がやって来たのかをはっきりと説明した。

オホーツク海沿岸に立地する[白浜]村は、海岸沿いに一本の道が貫いていた。村外れに住むシンキンチョとその娘を訪ねる前に、白川は日本人が店主を勤める海辺の一軒目の家に寄って食事をしようと私を誘った。彼はお茶をご馳走してくれ、二つのお椀に入った昼食(ヒルゴハン)を持ってきてくれた。

ようやく舌が回り始めた。このアイヌ人はロシア語を少し話す。したがって私たちは通訳なしに直接理解し合うことができた。彼は、ピウスツキの生徒だったアイヌの友人を呼ぶことに決めた。顔に包帯を巻いた男がやって来た。歯が痛いとのことだった。この出会いを喜んだ。木村愛助(キムラ アイスケ)というこの男は「有名なピウスツキ」の生徒であることがすぐに判明した。ピウスツキが出発間際に残した写真をまだ所持していたからだ。

少し黄変するも素晴らしいその写真は、北海道の函館で撮影されたものだった。

「この写真を私に残したくないようでした」

多分コピーを作るためだけに、置いて行ったのだろうとのことだった。

彼らは二人とも手当たり次第に語った。

「母親が彼に送ってきたものを、ピウスツキはすべてわしらと分け合った」

「自分のことはいちばん最後だった」

²⁵ 1903年7~9月にかけて実施された北海道アイヌ調査に関しては、シェロシェフスキの旅行記「毛深い人たちの間で」(本書に収録)を参照されたい。

「いつも他人のことを考えていた」

彼らは私と知り合ったことを喜んでいて、というのも私がポーランド人だったからである。私が思わず確信したのは、彼らが固い友情の絆で結ばれ、まったくよその、遙か彼方の国とも愛情で結ばれているということである。国そのものよりも「ポーランド」という名称と結ばれているのだ。

この人物の個性、善良さ、心の驚くべき影響があったに違いない。そして現在まで生き続ける当地の人々の記憶は、決して消し去られることがなかった。彼らの記憶は三十年間何も変わらず、懐かしさを込めて彼を語り、まるでそれが昨日であるかのように思い出している。

「わしらには兄弟のようないい人でした」と白川は言い、その言葉の中には、自分たちすべてとまったく異なる白人との友情の価値がすべて含まれているかのように思えた。それは流刑、懲役、拷問などサハリンにとって破滅的な時期であり、それまでは平穏だった国が絶望と恐怖の淵に立たされた時期だった。

私たちはアイヌ人だけが住んでいる村を通った。私は自分の同伴者にいろいろと聞いてみた。

「家はすべてが日本風の木造に見えるね。ここでの暮らしはどうだい。うまく行っているかい」

「あまりよくないですよ。以前は自由でした。今はそうではありません。何かにつけ《罰金》です。森で木を切っても、動物を殺しても罰金です。魚だけは自分の好きな場所で好きなだけ捕ることができます。魚に関しては悪くはありません。魚で生きているのです。ニシン漁は四年前からうまく行っていない。去年は本当にひどかったです。アイヌ人の生活はよくありません」

家の隣で作業をしている彼らにはすでに数回会った。彼らの中には顎鬚をはやした人が数人いた。写真をとることには同意しなかったが、白川が彼らにアイヌ語で少し話をする、すべて解決した。一言だけ理解できた。それは「ピウスツキ」だった。

その後で、彼らはどうやって勉強したかを思

い出してくれた。小田寒で一年、内淵で二年学びました。しかしもっと情報を得たかったので、質問攻めにしたが、それ以上は何もなかった。

鉾山で鉾石の塊を少しずつ削り取るかのように、思い出をひとかけら、そしてまたひとかけらと手に入れた。突然奮起して、すぐに二つ三つの事柄を話したかと思うと、また再び長い沈黙が続いた。それはまるで記憶の最も深い層に潜り、そこに沈む詳細や印象を探しているかのように思えた。

シンキンチョに会いに行った。彼女はすでに私たちの到着を知っており、私たちに会いたいとじりじりと待っていた。アイヌ人の誰かが彼女の手を取って連れてきた。彼女は盲目だった。彼女は目の上に黒い目隠しをしていて、その目隠しの下にはショールを巻いていた。彼女は悲しみに満ち、誇りに溢れ、素晴らしい黒い髪をしていた。

結婚したアイヌの女性の習慣として、唇の上に入れ墨をしていた。盲目の人に特徴的な歩調で何歩か進んだが、しかし、しっかりと立っていた。まだ老いておらず、五十七歳だった。彼女は何も言わなかったが、彼女の後ろにいた私の同伴者のアイヌ人が話した。

名前は、キムラ、シラカワ、ジュサウンマと言った。どれが一番正確な名前か、どれが現在の名前なのか決定するのは難しかった。彼女の息子は、苗字が木村(キムラ)、名前が助造(スケイツウ)と言った。娘はキオ[キヨのこと]といった。

息子は村にいなかったが、娘は隣の家の敷居を跨いで出てきた。少しびっくりしたようで、取り乱していた。彼女の夫はアイヌ人で名前を大谷熊吉(Otani Kumaksci)(オオタニ クマクスチ)と言った。三人の娘と一人の息子がいた。

父親は、キオと同じように黒い肌の持ち主だった。私の前で長女を見せたがり、家の奥から手で彼女を連れて来た。顔が丸く、大きな黒い目をした、しかし髪の毛は完全にブロンドの四歳の女の子だった。

(十五)パン、ギウニュウ

白浜からさらに北へ向かった。この先、つまり白浦までの間には、すべてのポーランド人か

らもっとも離れて暮らしているアダム・ムロチコフスキが住んでいた。白浦の向こうには鉄道網はあまり延びていなかった。

私はひとりだった。菱沼氏^(注5参照)は豊原に帰ったからである。もう道中で彼に会うことはない。列車の中は人でいっぱいだった。もちろん日本人だけであった。私たちは目的地に近付いていた。雪の中の海岸を通して白浦にゆっくりと向かっていた。彼らは和服の中から財布を取り出し、丁寧に小銭を数えながらお金を用意していた。和服は日本人にとってポケットの役割を果たしているのだ。彼らは、まるで一つの言葉を確かめ、約束するように、会話の中でそれを繰り返した。その言葉はポーランド人と会った際にすでに覚えていたので理解できた。それは「PAN」、つまりパンのことであった。

私たちは[白浦に]到着した。私は列車から降りた。誰かが響きのよい大声で「パン、ギュウニュウ、パン、ギュウニュウ」と叫んでいた。「ギュウニュウ」とは牛乳のことである。乗客は、窓からお金を持った手を出し、清潔な紙切れに包まれた大きなロールパンを手にしていった。背中に帯を巻いて背負った大きな箱を抱えて、愛想のいい見た目のいい男性が駅の中を練り歩いていた。彼は襟を立て、耳まで帽子をしっかりと深く被っていた。この人物については以前にたくさん聞いていた。これがアダム・ムロチコフスキだった。人里離れた駅で彼は見たところ成功しているようだった。手に持っていたものがあつという間になくなると、自分の小さな店、つまり空のお盆を持ったまま、私の方に振り向いた。サハリンに私がいることを知っていて、私の到着を待っていたのである。

列車は出発した。私たちは雪の中を進んだ。彼は駅からすぐ近くに住んでいた。家は自分で建てたとのことだった。家は見たところこの集落で一番しっかりとしていた。自分が焼くパンのために評判がよくなり、お金も少し貯めていた。家の中には何もなかった。何度も新たに始めなければならなかったという。何とかやっていた。

しばらくの間、いろいろと話をした。しばらくすると、彼はできる限り私を受け入れ、もてなそうとした。彼の妻は数日前から病を患って

いた。妻は豊原[旧市街]の出身で、ジェヴスキ家の長女[スタニスワワ、愛称スターシャ]だった。

私は彼に、私が滞在したときには村にいなかったシンキンチョの息子・助造を、明日、白浜のアイヌ人が連れてくると約束したことを伝えた。ムロチコフスキはすべて知っていて、サハリンに滞在して以来、この問題に関心があった。手元に残ったブロニスワフ・ピウスツキの写真のコレクションを私に見せてくれたほどであった。それは、彼がアイヌ人から手に入れたのだが、彼によると、日本人はこの幸せな所有者からこの記念の品を買い取り、手に入れようとしたそうだった。

それはブロニスワフが日本人と一緒に写っている数枚の写真、そして両親の写真二枚である。そこには「私の最も大切な、そして最も不幸な息子へ」という感動的な献辞が添えられていた。彼はこれらの品を何よりも一番大切にしていた。私にも何も渡したくないようだった。ここサハリンで何よりも明らかなのは、信頼というものが崩壊しているということである。彼は言った。

「今のような不確かな時代、信頼できる人なんて誰もいませんよ」

彼は恐らく、ポーランドに帰ったら個人的に一番信頼できる人の手に渡すのだろう。

突然、ドアを誰かがノックした。すぐに靴を脱ぎながら、黒いフロックコートを着た日本人が不自然な愛想を浮かべて入って来た。その人物についてムロチコフスキが言った。

「地区の警察署長だ」

警察はもちろん私の邪魔をしに来たのだ。十分ほど私と話をしに来たと彼は告げた。彼は「ゴメンナサイ」と言った。「すいません」という意味である。わたしは「ドウイタシマシテ」と言った。「問題ありませんよ」という意味である。私たちはお互いに対応し合ったのである。望むところである。会話が始まった。

それは多かれ少なかれ、会話というマスクをかぶった尋問であった。ムロチコフスキは私の肩代わりをしてくれた。彼はよりおしゃべりになり、彼の古い知人であるこの新参者に日本語

で片をつけてくれた。最終的に私たちは数分で彼から逃れることができた。そして白浜からアイヌ人たちがやって来たときは、どんな犠牲を払ってでもこの出会いに臨席しようとしていると知った。来たいのなら来させるがいい。私たちは署長に「それではまた明日」と言った。

彼は「アリガトウゴザイマス」と言って、礼儀正しくそして卑屈に引き下がった。

ムロチコフスキは、今度は夕食の準備をした。台所で忙しく立ち回り、どこかの老人が彼の手助けをした。これはルプキン的人物の第二の例である。つまり流刑されてきて、島の南部に今でも生きているロシア人の「将軍」で、すでに記憶にないくらい昔からここに住んでいて、なぜか分からないが、どこにも行く所がないので、ムロチコフスキの好意でここに住んでいるのだ。彼の助けはわずかで慰めにもならなかったが、酒には目がなく、いったん酒瓶を手にとると、どうしようもなかった。脅しても頼んでも無駄で、そのままだった。したがって、ムロチコフスキは、アルコールは純粋なものも傷んだものも、一滴として家の中に置かなかった。「将軍」はいつも何とかして手に入れる方法を見つけるのだった。

アダムとは夜遅くまで一緒に座っていた。彼の家は雪で覆われ、屋根の上の雪で押しつぶされそうになっていて、世界から切り離されたかのようで、彼は外国人の中でひとりぼっちのようだった。彼は自分の家のそばに所有するわずかな土地と、非常に苦労して手に入れた、列車でパンを販売する権利に関して語った。

しかし、現在ではすでに樺太全体で、アダムのパンを超えるものがないことは明らかだった。ただ問題は日本人が彼に庇のついた緑の帽子を被るようにと命じることだった。この帽子は鉄道職員の印で案内係であることを示しているので、列車や、時間などについて誰もが質問してきた。

しかし、彼は日本語が上手だったので、まったく問題ないとのことだった。彼は帽子に日本語の文字で次のように書いていた。「ポーランドのパン」。こうやって彼は帽子を被らなければならないという不愉快なことを埋め合わせていたのである。

彼はとてもおしゃべりだった。パテク公使と十年前の彼のサハリン旅行の話になると、彼は言葉に詰まり始めるのだった。

「彼は私には父親のようでした。困難な時代に私を支援しようとしてくれました。誰も私を信用しなかった時代です。私が仕事のための手以外には何も持たなかった時代です。仕事も非合法、その中でも最も非合法的な仕事しかあてがわれませんでした」

というのもムロチコフスキはその頃、北樺太からやって来たばかりだったからだ。

「借りてきたお金で借りてきたズボンを穿いて、私は公使のための晩餐会を準備しました。大変でしたよ。新参者として、サハリンではまだ知られていない人物として、このような事柄に携わることになろうとは。しかし誰かがやらねばなりませんでした。みんな私のことを疑いの目で見たが、結局うまく行きました」

それから長い年月が流れた。サハリンの共同体の中で、ムロチコフスキは権威を手に入れた。自分に何ができるか、自分は何者であるかを示した。彼はポーランド人の中で、もっとも忠実で最も自覚的なポーランド人であった。しかし姑は言うに及ばず、舅であるジェヴスキも統率力があって、かなり頑固な人物なので、現在のアダムの立場がどのようなものかは分からない。しかし彼がここで成し遂げたことは決して小さくないのである。

(十六) 大したことのない物語

「アダムさん、首元にある傷は何ですか」

私はこの頭を一周する深い傷跡に初めから気付いていた。それは首の上の切り傷であるが、耳の片側から耳の反対側まであり、それは後ろ側、つまり笑顔の裏側にあった。

「大したことないですよ。アムール川沿岸のニコラエフスクで、革命時代に切りつけられたのです。話すと長くなりますよ」

「それなら初めから教えてください」

彼は、ウッチ県ブルス郡のスタレ・ロツキェ村で 1895 年 4 月 6 日に生まれた。まだ若い少年だった彼を戦争が襲い、彼は戦争に赴いた。1914 年と 1915 年にジャウドフとモドリンで負傷した。モドリンの後、しばらくの間ペテルブルクの病院で過ごした。健康が回復したが、今度は前線には背を向け、初めは事務官として勤め、次には下士官学校に通った。彼の告白によれば、生まれた時から冒険的な気質を持っていて、世界のどこか遠いところに行く機会があったので、すぐにそれを利用したのだった。

1917 年には既にハバロフスクにいた。

その税務署で五等官だか九等官だかであった。しかし、再び冒険心が彼を捉え、長い間辛抱することはできなかった。その一年後にはニコラエフスクに住み、オホーツク海で魚を捕え、漁船のオーナーとしてかなりの金を稼いだ。時代は変わり、日本が支配することになり、漁船はもう漁に出ることはなくなり、河や海には日本人の貨物を積んだ船が往来することになった。それと同時に冬期には、テムトンやアルダン地方などの北部で金を堀り、ゼヤに住んでいた。

それは 1921 年のコルチャク時代であった。ちょうどムロチコフスキが再び砂金を求めて山に入ろうとしていたとき、数日間妻と子供と一緒にゆっくりとしていた。ちょうどそのときにトリャピーツィンがニコラエフスクを占領したのだった。彼は夜に逮捕され、縛られ、レンガ工場の地下に連れていかれた。そのとき彼は二十代だった。自分がどうなろうとしているか分かった。裁判もなかった。地下の隅で殴られた。大きなサーベルを持ったコサックが二人いた。一人ずつ前に出された。最初に首が飛び、それから胴が飛んだ。血が噴水のように吹き出した。

そしてアダムの番になった。

「私は首を切りつけられました。もしかしたら少し前にすでに走りだしていたのかもしれませんが。頭を前方にかがめ、首すじにカミソリの刃を感じました。私の頭は切り離されませんでした。一インチか二インチ、私のことが分かるように傷をつけただ

けでした。神の奇跡で誰かが助けてくれたのでしょうか。さらに五人の首のない体が私の方に倒れ掛かって来ました。

夜がやって来ました。私は自分の血と他人の血を全身に浴び、羊のように立っていました。首輪がはめられました。私はひとりではありませんでした。墓穴と人肉の塊の中から三人が起き上がって来ました。彼らは私と同じように切りつけられていましたが、殺されはしなかったのです。

深夜に私は家に戻りました。妻と子供たちは、みんな殺されていました。逃げねばなりませんでした。犬橇に乗ってサハリンまで逃げました。海の大部分が結氷していたので四マイルほどそこを進みました。しかし氷はすでに流れ出していたので、はっきりとは覚えていないのですが、板の助けによって他の数人と一緒に渡らなければなりませんでした。上げ潮があるとは予想していませんでした。不幸なことに私たちは日本海へと流されました。しかし幸い日本の戦艦に助けられました。

日本人がアムールに帰って来た後で、トリャピーツィンたちにより殺された遺体が集められました。水の中に長い間浸かっていたので、誰が誰かは判別するのは困難でした。捕えられた日本人たちは真冬にもかかわらず、氷の穴に飛び込むようにと命じられていたからです。今はもう春でした。しかし、後でどのように判別するかを覚えました。釘が二本か三本ずつ打ち込まれていました。肩に肩章の星の代わりにレコード針が付けられていました」

最終的に彼はアンドレイ湾(コッピ川)の利権を得た。しかし、ポリシェヴィキが戻って来た。再び、すべてがダメになった。そのとき以来サハリンに留まり、日本の占領時代にはサハリン北部に行った。生きるためには何でもやった。医者の手助をやった後には、彫刻家になり、その後では、アレクサンドロフスクで、ポーランド人の子供のための小さな学校でポーランド語を教えた。

日本人が出て行く前に北部を捨て、徒歩で南

樺太に来た。そのときには日本語もよくできるようになっていた。ポーランド人がわずかにいたが、誰も彼を助けてくれなかった。したがって、斧と鋸を手に森で深夜の二時から夜まで働くこともあった。塹壕も掘った。血を売ったこともあるという。

しかし、彼は頑強なポーランド人である。すべてを乗り越え、死から一步ずつ遠ざかり、数年間持ちこたえた。血を売ったが、儲けにはならなかった。苦労してお金を手に入れ、パンの製造を始めた。それがうまく行った。現在では金持の一人として数え上げられている。ここに残ることは望んでいないとのことである。戻るために十分に稼ごうとしている。ポーランドへ戻るためである。

「去年、母親がサハリンの私の所を訪れたんですよ」

「お母様がですか」

「私の母はもう高齢で、ウッチの大聖堂のそばで暮しています。十七年間会っていませんでした。随分前から息子は殺されたと思っていたらしいです。私が生きていると知るとすぐに会いたくなり、樺太にやって来たのです」

この旅行に関する話だけでも旅行本の一章が必要となるほどである。年老いた女性が、旅の困難や言葉の問題にもかかわらず、ロシアという国も恐れずやって来たのである。日本にいる息子に会いにウッチからやって来たのである。ウラジオストックでは不誠実な人に騙され、ドルをルーブルに交換したが、日本への切符はルーブルでは売ってもらえなかった。

その後、日本人は、敦賀に苦労のすえに辿り着いた彼女を、ポーランド公使館に尋ねることなしに、ウラジオストックまで送り返した。彼女が自分のことを説明できなかったからである。後に警察を通して彼女の事情が判明したが、ときすでに遅く、ウラジオストック行きの軍艦はすでに出発していた。一番早い戦艦で彼女を連れ戻すようにと船に電報が打たれた。

その翌週に彼女は戻って来た。息子がすでに支払いを済ませていた。息子も母に会いに敦賀にやって来ていた。ジャケットとシルクハット

という自分が持っている中で一番いい服装をしていた。日本人たちは彼に謝罪し、彼は許した。停留所で彼はさらに半日待った。息子は敦賀の港で、ウッチからサハリンまで辿り着くかどうかとも分からないままやって来た母と十七年ぶりに再会した。

彼女は白浦に四カ月滞在した。しかし、彼女はそこに残ることは望まなかった。彼女は息子に告げた。

「お前はここにどっぷりと浸かり、根を降ろしている。ここで生き、そしてここで死ぬことになるのでしょうか。私にはそれはできません。私の土地がある場所に戻らなければなりません」

「彼女は戻り、またウッチの大聖堂の近くに住んでいます」

このように、彼が回想する間、私はムロチコフスキと二人きりで夜遅くまで一緒にいた。あらゆる考えをもう捨て去ってしまった人でも、心の底には祖国の思い出や記憶が激しく息づいているのを、私は何度となく目にしてきた。しかし、その感情を抑え込んでいる人もいる。多くのことを忘れ、考えることもなくなり、心配もしなくなっているにもかかわらず、ある日突然「ポーランド」という言葉が現れる。

この言葉は、多くの人にとっては毎日使っているのもう擦り切れているが、ここに住んでいる人にとっては非現実的な次元から成長し、この名前と結びついた考えはもはや非現実的でもなく、超現実的となり、もっとも高尚なものとなる。しだいに力と、言葉では表現できない何か悲痛で大きな内容を持つようになる。その言葉に本質までが揺り動かされる。そうなる口でなく、手が何かを言おうとする。身振りは不器用になり、何も表現しなくなる。まるで祈るかのように手を重ねる。厚い手、労働で疲れた手は、堅く握られ、閉じられ震え始める。向こうでは誰も待っておらず、こちらには誰もやって来ず、忘れるときもあるが、打ち克ちがたい叫び声のように、ノスタルジーが震え、感覚と思考の奥深くを蝕むのである。

日に焼け、皺だらけで、不屈さと厳しさを表現した顔、最も困難な環境で貧困に耐え、希望

もなく、疎外と孤独のなかで生活のために厳しい戦いを続けてきた厳しい、断固たる力強い顔の中にある血に溢れた目は、突然、柔らかく、潤いを帯び、子供のように純粋に光り輝くが、とても悲しそうな雰囲気をもたらすのだった。

(十七) 客人

白浜のアイヌ人が約束通りやって来た。私は列車の中でアダムと一緒にいた。彼はパンをすべて売り尽くし、アイヌ人たちにご馳走し、思う存分おしゃべりをするためにやって来たのだ。白川成人(シラカワ ナリト)、木村愛助がいた。先ごろ話題になっていた助造少年を連れて来ていた。昨夜遅くに白浜に戻って来たとのこと、私がここにいることを知って、とても会いたがったのだという。言った通りだった。彼の顔立ちはアイヌ人風ではなかった。顔立ちは鋭く、力強くはっきりとしていて、とても威厳に溢れていた。とてもどぎまぎしており、日本語以外は何も話さず何も理解しなかった。

天気は例外的によく、太陽の中で雪が煌めき、その辺り一帯でも今日は銀色の海岸線が続き、そこには欧州トウヒの木が生い茂って、半円状に白浦を取り囲み、沿岸の谷間の底に立地して、大気中では光に満ち、青くそして白く輝いている。

この訪問について、白浜から警察への届け出はなかった。昨日の招かざる客である警察署長がこのことを知ったのは、私たちがかりうじて外套と靴を脱ぎ、お茶の湯の準備をしているときだった。中庭で犬が吠え、雪の上を誰かの足音がし、その後、扉をノックした。どうしようもなかった。私は質問を一つもする間がなく、すべてにおいて今来たばかりの人物が私の代役を務め、すぐに自らインタビューを始めた。私は第二のプランへと移った。この人物が満足するまでノートを取り、くたくたになった犠牲者を私に委ねるのを待った。

取り調べは日本語で行われた。したがって私にはまったく利益がなかった。しかし、このアイヌ人の友人に対する質問の多くが私に関するものであることは容易に想像がついた。

これは、私の意図の純粋さを疑っているわけ

ではなく、これがこの国の習慣であり、社会秩序を守るための義務なのであった。彼らの好奇心はいつも同じようにナイーブで、ときにはこちらの心を和らげるようなものであり、絶えず同じ証言、告白、宣言を何度も求め、それを書くのが難しそうな絹のように薄い紙に書きつけるのである。白人がこの日のいずれの帝国の国境を越えた瞬間に、自動的に容疑者のカテゴリーに入れられるとしたなら、思想もなく、ただ言葉と目的と行動が書き連ねられているこのような長い報告は、いったい誰が読みたがるのであろうか。

保安機関[樺太の治安機関・特高警察]の私に対する関心は頂点に達し、私は完全に調べられ、まるで腹に穴を開けられたかのような感覚があった。私は自分の身を守ろうとはしなかった。その代わりに、私がまる二日かけてここを訪問し、己のテーマに関して多くの情報を入手したことは、すべての人を喜ばしているかのような感覚があった。彼らは私に深々と頭を下げたが、彼らの永遠の友情と感謝に満ちた思い出を私が手に入れたことも間違いがなかった。

警察署長は一時間におよぶ取り調べで疲れていた。というのも容疑者はお茶を飲んでいるだけで、会話の間何もしゃべらないからである。

助造を連れて来た二人のアイヌ人は、ずっとブロンズワフを覚えていた。彼らが別れて以来、一度ならず思い出していた。例えば、彼が住んでいたアイ村のバフンケ村長のもとで暮らしていた様子、村長の姪がやがて彼の恋人になる様子などである。彼らの結婚式が、古い伝統に則り、厳かに盛大に行われた様子である。

話題は助造に移った。彼は三十二歳だがかなり若く見える。職業は漁師で、アイヌ人はすべて漁業に携わっている。しかし、その後で犬[橇]に乗り始めた。東京の博覧会までも三十頭の犬をつけた犬橇でやって来た。天皇の娘を犬橇に乗せ、彼の犬と橇はみんな気に入ったそうである。

しかし、今の暮らし向きは悪い。漁業はうまく行かなくなり、犬も売らねばならなくなった。手元には何も残らなかった。

貧困の中で生きているにもかかわらず、金銭や施しを中々受け入れなかった。特にシンキン

チョは半ば諦めながら、しかし強情に、ブロニスワフから何か生きている印や思い出の品が届くという考えを捨てていなかった。子供たちはそうではなかった。どこから情報を得て、どうして覚えていることができるというのだろうか。今となってはただ古い親友である。[白川]仁太郎と[木村]愛助はこの子供たちを違った風に見ていた。子供たちを眺めながら言った。子供たちに話しながら、彼らの考えや感覚の中に、思い出や、聖なる偉大な記憶を植え付けようとしていた。彼が現在生きていて、そして、これからもずっと生きて行くであろうサハリンには、決して戻ることはないこの人物に関する記憶をである。彼らは、その人物がここにいたということの証人なのである。

列車に乗る時間になった。明後日には豊原から東京への帰路に就く。白浜までアイヌ人たちと一緒に帰った。私にアイヌのサーベルをくれた。私はそれをポーランドへ持ち帰って、ピウスツキ元帥に贈り物として渡した。

彼らは車窓の向こうでずっと立っていた。いつもより早く舞い降りた夜の闇の中で、駅のホームに降り、車窓の向こうで立ったまま私に手を振った。私はプラットフォームに降りた。列車が動きはじめたが、私は彼らを見ていた。彼らは誰もいなくなった駅の線路に長い間立っていた。夜の中に沈んだ三つの黒い影が、雪を背景にしてとてもはっきりと見えた。カーブを描く列車が私の向こうにあるものをすべて隠すまで、彼らはずっと佇んでいた。

(十八)エピローグ

サハリンに住むポーランド人をめぐる私の旅と滞在をめぐる名声は、日本人がほとんど忘れていた植民地とその歴史に対して、突然注意を傾けた日本の新聞のおかげである。

多くの雑誌や新聞に、サハリンの追放者[流刑者]と島の北部で生きるその子孫をテーマにした記事がたくさん現れた。その中でも最も多くの関心を集めたのが、現在の日本の北方全域で暮らすアイヌ民族の生き残りの研究者であ

り、彼らを愛していたブロニスワフ・ピウスツキである。

東京へ戻る途中で、地方新聞の記者がすぐに私を取り上げた。私が差し出さざるを得なかった情報にセンセーションの味付けをして、アメリカ映画風の必ずしも美味しいとは限らない感傷主義、つまりあまり優れているとは言えないスタイルへと仕上げていた。東京の公使館通訳は数日間たつぷりと仕事できた。

私の記事はロシアの新聞や東方で出ているイギリスの新聞にも掲載された。そこにはコメントや補足などが溢れていた。コメントはあまり的を射ておらず、たいていの場合とんちんかんだったが、補足は興味深いものもあり、注意する価値があった。例えばロシアの新聞『ルボル(メガホン)』を通してハルビンから、サハリン時代のブロニスワフを知っているというティシェンコ某の手紙が私の許に届いた。

1901年にウラジオストックでピウスツキに知り合い、それはすでに政治犯としての刑期を終えた後だったと彼は書いていた。新聞で現在書かれているのとは異なり、彼は大学教授などではなく、大学の自然科学の学生であったとのことである。

ウラジオストックのロシアのリベラルなインテリのグループが、追放者であったピウスツキの運命に関与して、「彼をアムール地方研究会博物館の資料管理者の地位に就けた」という。このポストは悪くなかったが、「ウスリスクのコサック軍用地の営林署長」であり、博物館の館長だったパルチェフスキー²⁶が彼のことを疑いの目で見ていた。

パルチェフスキーは断固とした君主主義者であり、革命家ピウスツキが気に入らなかったが、加えて両者の性格も上司と部下の間柄では余りにも違い過ぎたという。ティシェンコは当時、彼らの共通の友人であった地質学者の J.S. エデルシュテイン(Edelsztejn)の許でピウスツキに会った。エデルシュテインはピウスツキにとっても好意的だったそうである。

ティシェンコは、ピウスツキがとても内に籠り物静かだったと言う。意見と行動において彼

²⁶ N.A.パルチェフスキーは、アムール地方研究会副議長だった。

はいつも独立を保っていて、職業上の主従関係にはまったくなじまなかったとのことである。

しばらくすると彼は自ら望んでサハリンに戻ることを決断して、友人や庇護者を驚かせた。以前に彼を罰したロシア政府が、今度はささやかではあるが政府の仕事を彼に提供したわけである。その仕事はアイヌ人に天然痘の予防接種をすることであった²⁷。したがって、ティシェンコを驚かせたのは、このような慎ましい地位のために大都会と別れを告げ、彼に好意的なロシアのインテリの文化的環境を放擲したことだ。この若い学者の好意は、彼がアイヌの生活や習慣に興味を抱き、恐ろしいほど不衛生な生活条件と恒常的な貧困に生きるこの愛想のよい未開人を愛したことに由来する、とエデルシュテインは説明した。後に語られたところによると、ピウスツキはその地方の民族学の研究に興味を覚えたので、自分の運命には満足していたという。

樺太にいたポーランド人流刑者は、日露戦争が終結するや、日本の将校たちと心の交流を持った²⁸。現在の南樺太が日本の領土になると、ポーランド人流刑者は全員が自由の身となり、西ヨーロッパへと向かった。ピウスツキもそこに含まれていた。

彼はサハリンの家族から遠く離れた所で亡くなった、とティシェンコは手紙を結んでいる。

私が東京を出発する二日前、ある日本人が、非常に重要な用件で私に会いたい、と公使館に問い合わせて来た。翌日会う約束をする。彼がやって来る。私の旅行だけでなく、日本の新聞が伝えるすべての情報も、とりわけサハリン関

連の記事は三十年前のものからすべて目を通していているそうだ。自分はピウスツキの友人なので、とりわけ関心があると告げた。

ポケットから写真を取り出した。

「これは 1906 年、離京直前の彼から貰った写真です。この写真はあなたに差し上げます。ポーランドの方には大きな思い出になるでしょう。私にとっては友情の思い出だけで充分です。もしできるなら、その代わりにピウスツキ元帥の写真をいただけないでしょうか」

この写真には、私が樺太のアイヌ人の許で見たものよりも年老いたブロニスワフが写っていた。写真は、まさに彼が日本から発つ直前に撮影されたものだった。写真の裏面には、もう色褪せていたが、次のような献辞がロシア語で記されていた。

日本の友人アキラ・カジマさんへ
ヨーロッパで再会することを願いつつ
善きそして長き思い出に。

B.ピウスツキ

日付は「1906 年 6 月 24 日、東京」とあった。その下には、同じ手で書かれた追伸が残っている。現在ではやや命令調に響くかもしれないが、この言葉はやはりブロニスワフの思い出とともに残るであろう。

これまでは敵対していた民族や人種
との統一と友情という大義に仕えよ。

²⁷ 主要な業務は、樺太アイヌとウイльтаの民族資料収集であった。

²⁸ 日露講和のときの様子はコルサコフの鈴木陽之助領事の記録に詳しい(鈴木陽之助『残留露人取調書』駐コルサコフ日本領事館、1905)。

* 樺太に在住したポーランド人の名前等については、寒川光太郎『露囚物語』(注 11 参照)のほか、「樺太庁管下居住外国人名簿」樺太庁(1923)、「南樺太外国人ノ状況」樺太庁(1927)、「樺太波蘭人会発会に関する件」樺太警察署(1937)その他を参照したほか、当時の豊原在住者への調査等により補足した——尾形。

* 本稿は、科学研究費補助金による研究《北海道多文化共生におけるサハリンからの移住者の役割》(研究課題番号:23310172、代表者:パイチャゼ・スヴェトラナ)の成果の一部に基づいている。

* Author & title: A.Janta-Polczyński, “Poles in Sakhalin.” Japanese translation from the Polish by S.Samitsu and commentary by K.Inoue & Y.Ogata.